はず少しく酒氣を帶びてゐるやうであります。

一目見たゞけで忠作は、たしかに見覺えのある若ざむらひだと思ひました。深く記憶を繰り返して見るまでもなく、目から鼻へ拔ける此の少年の頭には甲斐の德間入の川の中で砂金をすくつてゐた時、あの崖道から下りて來て道をたづねたのが七兵衞で、川を隔てゝ向ふの崖道を七兵衞と共に歩いて行つたのが、今ここへ出て來た若い人であります。

「宜しい、この人のあとを附けて見よう、自分は笠をかぶつて酒屋の御用聞の風をしてゐるのだから勝手が惡くはない」

忠作にあとをつけられてゐるとは知らぬ若い人、只今、薩州邸の用心門を立ち出でたのは別人ではない宇津木兵馬であります。あとをつける者ありとも知らぬ宇津木兵馬は可なりいゝ心持になつて、

　武藏野に草はしな〳〵多かれど摘む菜にすればはさても少し……

とロずさみながら芝の山内の方面へ歩いて行きます。

増上寺の松林へ入り込んだ兵馬は、その中の松の一本の下をグルグルと廻りはじめたが、刀の小柄を拔き取り其の松の木にピシリと突き立てゝ行つてしまひました。

兵馬の立ち去つたあとで、その松の木の傍へ寄つて見て、はじめて小柄の突き立てられてあることを知り、忠作はそれを無雜作に引拔いて松の木には目じるしの疵をつけ、またも兵馬の後をつけて行きます。

兵馬は朴齒の下駄か何かを穿いてゐる、忠作は草鞋の御用聞、兩人共に歩きも歩いたり、芝の三田から本所の相生町まで一息に歩いてしまひました。

さて、相生町へ來ると兵馬が例の老女の家へ入つたのを、忠作はたしかに見屆けました。

此處まで來て見ると、一體、この家は何者の住居であるかといふことを突き留めて歸らねばなりません。忠作は屋敷の周圍を二三度まはりました。

「今日は、また御用はございませんか」

裏口へ廻つて、こんな聲色を使つて見ると、

「三河屋の小僧さん」

「はい」

「ちよいと此處へ來て手を貸して下さいな」

「へえ、承知致しました」

呼び込まれたのを幸に潜りから長屋へ入り、

「今日は」

「小僧さん、後生ですから此處へ來て手を貸して下さい」

薄暗い中で頻りに女の聲。

「何方でございます」
「桝はないから早く來て下さいよ」
「此方から上つても宜しうございますか」
「何處からでも宜いから早く來て手を貸して下さい」
忠作は大急ぎで行つて見ると、一人の女中が桝を膝の流し元のあたりで頻りに呼ぶものだから、下に組み布いて天下分目のやうな騷ぎをしてゐる處です。桝落しをこしらへて鼠を伏せるには伏せたが、どうしてい丶か始末に困つてゐる處らしい。
「鼠が捕れましたね」
「小僧さん、早く、どうかして下さいな」
忠作は上手に桝を明けて鼠をギウと捉まへて、地面へ置くと足をあげて其れを踏み殺してしまひました。女中はホツと息を吐いて、
「おや、いつもの小僧さんと違ひますね」
と云つて忠作の面を見ました。
「どうか御贔負を願ひます」
忠作は頭を下げました。
そこへ、廊下を渡つて、また一人の女の人が、

「お福さん」
と呼ばれて鼠を押へた女中が、
「はい」と答へました。
「後生ですから、此れへ汲み立てのお冷水を一はい頂戴」
一つの銀瓶を手に捧げてゐます。
「畏まりました、あの大井戸から汲んで參りませう」
「濟みませんね」
廊下を渡つて來た女の人は、手に持つてゐた銀瓶を鼠を押へてゐた女中に手渡しすると、鼠を押へてゐた女中は其れを持つて水汲みに出かけたもの丶やうです。
「毎度有難うございます」
忠作はい丶加減の事を云つて立ち去らうとする時に、銀瓶を捧げて來た女の人が、
「もし、小僧さん」
と呼び留めました。
「はい、御用でございますか」
「あの、お前さんは毎日此處へ來るでせうね」
「はい、毎日伺ひます」

「それではね、ちよつと、わたしに頼まれて下さいな」
「へえ、宜しうございますとも、出來ますことならば何なりと」
忠作を見かけて何事をか頼まうとする此の女の人はお松でありました。
忠作は、その頼まれ事を勿怪の幸と立ち戻ると、お松は何か用向を云はうとして忠作の顏を見て、
「小僧さん、お前のお店は何處」
「三河屋でございます」
忠作は拔からず返答をしたつもりでゐました。
お松は暫らく思案してゐたが、やがて何を頼むのかと見れば、
「小僧さん、序の時でいゝから岩見銀山の藥を少しばかり買つて來て頂戴な」
と云ひました。
「はい、承知致しました」
岩見銀山の藥が買ひたければ、特に改まつて酒屋の御用聞に頼むまでもあるまいに、先刻も女中が鼠を伏せて頻りに騷いでゐたが、今もわざ〳〵岩見銀山を注文するのは、よく〳〵此の屋敷では鼠で困らされてゐるのだらうと思ひました。そこへ以前の女が銀瓶に水を滿たして持つて來ると、
「どうも御苦勞樣」



お松は其れを受取つて、もとの廊下を歸つて行きます。忠作も、お松から岩見銀山を買ふべく頼まれた小錢を持つて屋敷の外へ出てしまひました。
兵馬が未だ此の屋敷へ歸らず、忠作が其のまはりをうろつかない以前に、肩臂怒らした多くの豪傑が此の屋敷へ入り込みました。集るもの十五六名。
例の南條力が牛耳を取つてゐて、此の頃、暫く姿を見せなかつた五十嵐甲子雄も、その側に控へてゐます。
「さて、諸君」
南條が議長の役を承はつて、
「こゝに一つ、諸君の志願を募りたいことがある、それは勿體ないやうな仕事で、その實さまで勿體ない事ではなく、子供だましのやうな仕事で實は相當の危險がある、やつて見ることは雜作が無くてやり了せた後に祟りが來ないとは云へない、金錢に積つては幾らでもないが、或方面の神經を焦すには屈竟な利目のある仕事だ」
「そりや一體何だ」
「實は斯ういふわけなのだ、上野山内の東照宮へ忍び込んで……ぢや無い、闖入してだ、神前の幣束を奪つて來るのだ、幣束に限つたことはない、東照權現の前にある有難さうなものを、すべて引つくり返して來るのだ、それを、こつそりやつては可けない、面白さうにやつて來るのだ、

東照權現が有難いものには有難いが、有難くないものには此の通りだといふ處を見せて來ればいいのだ、そのお印に幣束を持ち歸つて來るのだ、事は兒戯に類するが、その及ぼす處に魂膽がある」

南條は斯う云ひました。何の事かと思へば、徳川幕府の本尊様である東照權現の神前に無禮を加へて來れといふ注文であります。成程、一派の志士には以前から斯ういふ事をやりたがつてゐる人があります。頼山陽の息子さんの頼三樹三郎なんぞといふ人も、たしか東照宮の燈籠が憎かつたと見えて其れを刀で斬りつけて、遂に捉つて自分の首を斬られるやうな破目になりました。ここでもまた東照宮の神前の幣束が目の敵になつて來たやうです。成程、燈籠や幣束を苛めた處で仕方がない。兒戯に類する仕事であるが、其をやらせようと云ふ者には相當の魂膽がなければなりません。

果して、それは面白いから行らうといふ者が續出しました。全體が悉く志願者ですから、指名をすれば不平が出る、宜しい、主人役を除いてその餘の同勢が悉く明夕押し出さうといふ事に決まつて會が終りました。宇津木兵馬が歸つて來たのは其の散會の後の事であります。

果して其の翌日、上野の東照宮に思ひがけない亂暴人が闖入しました。内陣の正面、東照公の木像を納めた扉の前に立つてゐる三本の金の御幣を擔ぎ出したものがあります。事の序に左右の白幣も拜殿に立てた幣も引こ抜いて擔ぎ出しました。お石の間で散々にお神酒を頂いて行つた形跡もあります。矢大臣の髯を搔きむしつて行つたのも此の輩の仕業と覺しい、獅子頭もかぶつて見たが被りきれないと見えて投げ出して行つたものと覺しい。階段の左右にかけた釣燈籠も外して行きました。それと聞いて寒松院の別當が駆けつけた時分には、件の亂暴者の影も形も見えません。

話によると、十數名の浪人體の者が怖ろしい勢ひで闖入して來て、居り合せたもの丶支うる遑もなく瞬く間に此の亂暴を仕了せて、鬨の聲を揚げて引き上げてしまつたとの事であります。腕に覺えのある者を擇んで、そのあとを追はせたけれど、亂暴人の行方は一向知れないとの事であります。

處が、實際は其の亂暴人が大手を振つて御成街道を引き上げるのを見た者があるといふ事であります。東照宮の御前にあつた三本の金の御幣を眞中に押立て、これ見よがしに大道の眞中を練つて歩いてまた五軒町までは行くまいと沙汰をしてゐるものもありました。けれども、また、それは嘘だ、彼奴は風を食つて、もう逃げ去つてしまつた、もう一足早かりせば、といつて地團駄を踏むものもありました。

「追つかけて行つたけれども、あの勢に怖れをなして逃げて來たのだ」と惡口を云ふものもある。

成程、彼等は、三本の金の御幣を眞中に押立てゝ大江戸の眞中を大手を振つて歩いてゐる。

「下に居ろ、下に居ろ、東照權現樣の出開帳だ、お開帳が拜みたければ芝の三田の薩州屋敷へ來るが宜い、我々は薩州屋敷に住居致すもので、今日、上野まで東照宮の出開帳をお迎へに參つたものだ、滅多な事を致すと神樣の祟りが怖いぞよ」

斯う云つて通行の人を威嚇しながら歩いてゐます。通行の人達は慄へ上がつて道を避けて通しました。何も知らない老人夫婦は本當に權現樣が薩摩屋敷までお出開帳をなさるのかと思つて、路傍に伏し拜む者もありました。

さうすると一行の連中のうちから、わざと物々しげに拜殿から持ち出した細い紙の幣で、その善男善女の頭を撫でゝやり、

「神妙、神妙、一心に歸命頂禮すれば後生往生疑ひあるべからず」

といふやうな事を云つて、餘計に善男善女を有難がらせたりするものもありました。

「尙ほ御信心がお望みならば三田の薩州屋敷まで出向いて來るがよい、三田の薩州屋敷」

鹿爪らしく、そんな事を云つて二言目には薩州屋敷を引出すのであります。まこと、薩州屋敷のものならば、たとへ、何かの恨み或は企みあつて、こんな事をやらせたり、やつたりしてからが、表向きに薩州の名前を出すやうな事は無かりさうなものであるのに、好んで薩州を振廻す處を見れば、薩摩の勢力を看板にする、實は無宿浮浪の徒でもあらうかと思はれるにも拘らず、その途中、この冒瀆極まる浮浪者を取締る機關が屆かないのは他に見てゐても齒痒いやうです。もしや市中取締の酒井左衞門尉の手に屬する者にでも出逢さうものならば、血の雨が降るだらうと町々の者はヒヤ〳〵してゐるけれど、酒井の手の者も、つひに此處まで行き渡らないで、この亂暴者の一隊は金の御幣を守護してどう〳〵三田の薩州屋敷へ乘込んでしまひました。

## 四

下總國小金ヶ原では、この頃妙なことが流行りました。

月の出る時分になると、一人の子供が一月寺の門内から一人の坊さんを乘せた一頭の馬を曳き出すと、

やれ見ろ、それ見ろ
筑波見ろ
筑波の山から鬼が出た
鬼じやあるまい白犬だ
一匹吠えれば皆吠える
ワン〳〵ワン〳〵

といふ此の地方の俗謠の節を、馬を曳き出した子供が面白く口笛で吹き立てると、小金の宿の者

共が、我を爭うて彼等の廻りを取り卷きます。

この寺から馬を曳き出して口笛を吹いてゐるのは兩國の見世物にゐた淸澄の茂太郎で、その馬に載せられてゐる坊さんといふのは、お喋べり坊主の辨信であります

彼等は此處を立ち出でゝ何處へ行かうといふのではない、毎晩夕方になると斯うして馬を引つぱり出して廣い原の方へと出かけます。

茂太郎に云はせれば、馬に水をつかはせ、不自由な辨信には、散歩の機會を與へる爲かも知れないが、土地の人は、それを待ち兼ねた見世物でもあるやうに駈出して集まるのが毎晩の事です。

集まつたものゝうちの子供達は、地面を叩きながら茂太郎の口笛に合せて、

やれ見ろ、それ見ろ
筑波見ろ
筑波の山の鬼が出た

と、歌ひ出すものだから娘達や若い衆が面白くなつて、それに和して、

鬼ぢやあるまい白犬だ
一匹吠れば皆吠える

興に乘つて年寄までが、それに合唱して歌ひ出すと自ら足拍子が面白くなり、馬の前後に集つて、盆踊りの身ぶりで踊りながら町から原へと練り出します。

もし／＼
あなたは誰ですか
わたしは盲でございます
たれを探しに來たのです
秋ちやんを探しに來たのです
三べん廻つてお出でなさい
お出でなさい／＼

この踊りが噂に廣がつて、北は相馬、南は葛飾、東は佐倉の方面から小金の町へ人が集まつて來ます。

噂を聞いて、踊りを見物せんが爲に來た者が知らず／＼興に乘つて自らが踊りの人とならないのはありません。その傳染性の速かな事は電波のやうであります。

一よさ、踊りの味を占めたものは其の翌日の暮るゝを待ち兼ねて集まらないといふことはありません。二里、三里、四里までは物の數ではありません。五里、七里、八里も遠しとせずして來り踊る若い者があります。これは必ずしも淸澄の茂太郎が吹く口笛一つに引き寄せられるのではありますまい。多くの人は人の集まる處が好きです。殊に若い男は若い女の集まる處を好みます。若い女とても亦若い男の踊るのを見て厭がるといふことはありません。

多數の人が、興に乘じて集る時には、老いたるも亦、若きに化せられて、そこには一種の異つた心理狀態が現はれるさ見えます。

小金ケ原に集まるほどの者は皆踊りの人さなりました。踊りを知らないものも動かされて、夢中に踊りの人さなりました。

踊らないのは唯馬上のお喋り坊主さ、音頭を取る清澄の茂太郎だけであります。

「茂ちやん、これは一體どうなるのでせうね」

興に乘ずるさ我を忘れて、家を明けつ放しにして夜もすがら踊り拔かうさいふ連中が若い者や子供はかりではありません。町の全體にほさんど幾人さいふほどしか留守番がゐないで、聲の美いものは聲を自慢に、踊りの旨いものは身振を自慢に、茂太郎の馬の廻りは忽ちの間に何百人さいふ人の輪を作ります。

その相歌ふ聲は、さしもに廣い小金ケ原の隅々に響いて、空にさやけき月の宮居にまでも屆かうさいふ有樣です。併し乍ら、その何百人が聲を合せて歌ふ聲は、いつも茂太郎が口笛一つに支配されてゐる。彼等の聲が如何に高くなり、如何に雜多にならうさも、馬を曳いて眞中に立つ茂太郎の口笛だけは高々さして、すべての聲さ動搖さの中に聳えてゐます。その口笛によつて音頭があり、音頭があつて初めて身ぶりがあるのでした。

單に、それは人間のみではなく、家々に養つてゐる犬さいふ犬がまた此の騷ぎに共鳴して爭つて表へ出てゝ、踊りさ踊りの間を面白く狂ひ廻り、トヤに就いてゐる鷄は、頻りに羽はたきをして飛んで下りたがる。いよ〳〵廣い處へ繰り出して馬をさゞめて立つさ、その周圍を輪になつて、人さいふ人が夢中になつて踊り狂うのは、冷やかに見てゐるさ物に魅かれたさしか思はれない振舞です。

斯う騷ぎが高くなつては、馬上に置かれたお喋り坊主の辨信も、そのお喋べりを切り出す際がありません。空しく馬に乘せられて見えない目で群集の騷ぎを聞いてゐるだけであります。

馬上の辨信は、その周圍に耳を聾するはかりの踊りの歌さ足拍子を聞きながら、馬の手綱を引つはつてゐる茂太郎に馬上から問ひかけました。

その時、茂太郎は、もう口笛をやめて居りました。最初は、いつも茂太郎の口笛から音頭が初まるのだが、斯う酣になつてしまうさ、茂太郎は頃を見はからつて口笛をやめて足踏みだけをして群集をながめてゐるのです。

「辨信さん、どうなるんだか、わたしにも判らないのよ、最初のうちはゝ わたしの口笛で皆んなが集まつたけれど、今さなつては、わたしが皆んなの踊りに引摺られてゐるやうなんだもの、若し、わたしが口笛を吹かなかつたり音頭を取らなかつたさすれは、きつさ皆んなの人が、わたしを殺してしまうだらうさ思つてよ」

茂太郎は足拍子を止めないで辨信を見上けました。

「毎晩、毎晩、倍ぐらゐづゝ人が殖えて來ますね、一昨夜の晩五百人あつたものなら、昨晩は千人になつてゐました、明日の晩は三千人の人が集まるかも知れません、小金ケ原は廣いから幾ら人が集まつても拘はないけれど、留守居をしてゐる者から、きつと苦情が出ますよ、娘を持つてゐる母親や、息子を踊らせて置く父親や、留守を預かつてゐる年寄達が、長く默つてはゐませんよ、いつか此の踊りを差留めに來るに定まつてゐる、けれどもお氣の毒なが斯うなつては、それ等の人の力で差留めることは出來ませんね、音頭を取る茂ちやん、踊り出さないわたしでさへも手がつけられないのに、留守をしてゐる人達に、どうして此の踊り狂う人達の血氣を抑へることが出來ませう、さうなるとキットお上のお聲がかりといふ事になるに定つてゐる、お役人が出向いて來て力づくで差留めるといふことに定まつてゐるよ、その時にお役人から、この踊りの音頭取りとして茂ちやんと、わたしが捉まつたら如何しよう、別にわたし達が惡い事をしたといふ譯ではないが、わたし達が音頭を取りさへしなければ、この踊りは鎭まるといふ心持で、二人を捉まへ牢の中へ連れて行かれたら如何しませう、茂ちやん、今のうちに何とか考へてお置き、わたしは、それが心配になるのよ」

辨信は茂太郎と共に相警しめる心で斯う云ひました。

二人が相警めてゐるにかゝはらず、一方には此の盛んなる人氣を利用せんとする者が現はれました。

誰がしたものか踊つてゐる間へ八幡樣や水天宮のお札を夥しく撒き散らしたものがあります。人は天からお札が降つたものと思ひました。

また一方には斯う云つて云ひ觸らす者もあります。

「世は末になつた、近いうちに世界の立直しがある、踊るなら今のうち」

この觸れごとは、短いながら人の眼前の快樂を唆るには可なりの力を持つてゐました。當時、人の心は何處へ行つてもさまで穩かだといふ譯には行きません。先覺の人は國家の急を見て奔走してゐるが、何にも知らぬ市井村落の人達とても何處ぞ心の底に不安が宿つてゐないといふことはありません。近いうちに世間に大變動が起るだらうといふ暗示は女子供の心にまで映つてゐないといふ事はありません。

「踊るなら今のうち」そこで世の終りが何となく近づいて、人が前路の短い慾望を貪り取らうとする形勢が見え出します。

小金ケ原の此の踊りが、遂に江戸にまで傳はるに至り、其盛んなる噂を聞いて江戸から見物に出かける者があります。見物に行つた者は必ず其の仲間に加はつて踊り出さねば止まないことです。今は、此踊りの塲で歌ふ歌が、やれ見ろ、それ見ろ、筑波見ろといふ、此の地方の民謠だけではありません。相馬流山の節を持ち込むものもあります。潮來出島を改作する者もあります。つひに「ゑいじやないか」を歌ひ出すものがあつて、その踊りぶりも得手勝手の千差萬別なものとな

りました。

その翌日は、お札の降つた處の原の眞中に白木造りの假宮が出來ました。その晩には假宮の前へ誰がするともなく夥しい鏡餅の供へ物です。紙に包んだ金何疋のお初穗が山のやうに積まれました。

多分、江戸から來た物好きがしたことでせう、白の襦袢に白の鉢卷の揃ひで繰り込んで來た一隊が鐃や太皷で盛んに「ゑいじやないか」を踊ります。

「一杯飲んでも、ゑいじやないか〳〵」神前のお神酒をかゝえ出して自らも飲み人にもすゝめながら踊りました。

小金ヶ原の眞中へ町が立ちます。物を賣る店が軒を並べました。

毎夜、一旦、こゝへ集まつて踊の音頭を揃へた連中が、散々に踊り拔いて各々、その土地々々へ踊りながら歸る。水戸樣街道を東へ踊り行くもの、松戸から千住をかけて江戸方面へ流れ込むもの、北は筑波根へ向つて急ぐ者、南は千葉佐倉を目指ざして崩れて行くもの、それに沿道に殘されたものが參加して踊つて行くから大河の流れのやうに末へ行くほど流れが太くなるのは當り前です。

その中心地、小金ヶ原へ一夜のうちに出來た假宮の宮柱も見る〳〵太くなりました。何時任命されたものか、もう其處に一癖有りげな神主が烏帽子直垂で納まつて居ります。

成る程、この神主は一癖も二癖もありげで、たゞ宮居の中に納まつてゐるのみでなく、笏を振つて手下の者を差圖し、奉納の鏡餅は鏡餅、お賽錢はお賽錢で恭しげに處分をさせる。お供へ餅は俵へ詰めお賽錢は叺へ入れて何處かへ送らせてしまふ。

それからまた此の神主は、清澄の茂太郎と盲法師の辨信の御機嫌を取ることが氣味の惡いほどであります。假宮は何の神樣であるか知らないが、その御本體を大切にするよりは茂太郎と辨信の御機嫌を取ることが大事であるらしい。

憐れむべき二人の少年は、今は此の神主が怖ろしいものになりました。

茂太郎と辨信は此の處を逃げ出さうとします。逃げ出さなければ、もう命が堪らないと思ひました。

けれども、斯うなつて見ると彼等二人は、盲目な群集を利用せんとする連中の爲に無くてならぬ偶像です。逃げようとしても逃がすまい。强ひて出ようとすれば此處に留まつてゐるよりも危ない。

額を突き合せて二人が相談をしたけれども、何を云ふにも辨信は盲目であり、茂太郎は子供である。

「では與次郎に相談して見ませうか」

「あゝ、與次郎に相談して見ませうよ」

二人は與次郎に向つて其の苦しい立場を說明して、よい智慧を借りたいといふことを哀願すると、暫らく眼をつぶつて思案してゐた與次郎が……待つて下さい。この與次郎といふのは一月寺の食堂に留守番をしてゐる七十を越えた老爺の事であります。一月寺の貫主は年のうち大抵江戸の出張所に住んでゐる。院代がゐるにはゐるが、これはほとんど寺の事には無頓着で短笛を弄して遊んでゐる。與次郎が寺の事は一番よく知つてゐて一番よく働くから貫主も一目も二目も置くことがあります。與次郎老人が一月寺の實際上の執事でありました。その與次郎が辨信と茂太郎に相談をかけられて暫らく眼をつぶつて首を捻つてゐたが、やがて、すか／＼と立つて戸棚の中から引出して來たのが、竹の網代の笈であります。

「我、汝が爲に箇の直綴を做得了れり」

與次郎老人が味なことを云ひ出しました。辨信は其の聲を聞いたけれども、その物を見ることが出來ません。茂太郎は其の物を見てゐるけれども、其の言葉を悟ることが出來ません。そこで老人は破顔一笑して諄々と直綴の說明をはじめたやうです。

どんな事に納得させたものか、その日の夕方には例によつて馬に跨つた辨信が一月寺の門前現にはれました。現はれたには現はれたが今日は、その現はれ方がいつものとは違ひます。いつも前に立つて馬を引張つて口笛を吹くべき筈の茂太郎が見えないで、その代りでもあるまいが、馬上の辨信法師は身なりに應じない大きな笈を脊負つて自ら手綱を取つてゐます。それに今までは裸馬であつたが、今日は質素ながらも鞍を置いて手綱をかませてゐます。たゞ辨信の脊中に脊負つてゐる笈が、いかにも大きいのに、辨信そのものが小兵の法師ですから、辨信が笈を負ふのではなく、笈が辨信を脊負つて馬に乗つてゐるやうに見えます。

それと見て集まつた人々は、今日の馬上の有樣の變つたのに驚き、また前にゐるべき筈の茂太郎のゐないことを怪しみもしました。それにも拘らず、盲法師の辨信は自ら手綱を掻いくつて徐々と馬を進めながら、今日は馬上で得意のお[illegible]りをはじめます。

「皆さん、老少不定と申して、悲しいことでございます。長らく皆樣の御贔負になつて居りました茂太郎が死にました……お驚きなさるのも御尤もでございます、皆樣がお驚きなさるより先に、私が驚きました、無常の風は朝にも吹き夕にも吹くとは申しながら、何とこれはあんまり情ないことではござりませぬか、昨日までは皆樣と一緒に、あゝして歌をうたひ、踊を見て居りました茂太郎が僅か一日病んで、眠るが如く此の世の息を引き取りましたと申しますのはほんとに私ながら夢のやうでございます、これと申しても、皆、前世の因縁づくでございますから、誰を怨み、何を悲しまうやうもございませぬ、それで、私は友達の誼みに、せめてあの子の後生追善を營みたいと思ひまして、今夕かうやつて出て參りました、私の脊中を御覽下さいまし、この大きな笈の中に此の世の息を引き取つた清澄の茂太郎が眠るが如くに往生を致して居りますのでございます、私は、これを持つて江戸の菩提寺へ安らかに葬つてやりたいと思ひまして、さうして斯うや

つて出かけたのでございます」

## 五

小金ヶ原の珍な現象が江戸の市中までも評判になると、其處に謠言がある。曰く、近いうちに江戸の町といふ町が火になる。その時は江戸の町民は悉く住む處を失うて、一時小金ヶ原へ假の都を作らねばならぬ。その時に最も幸福に救はれたいものは、今のうち小金ヶ原の新しい神様を信心して置くが宜しいと、それは隨分馬鹿々々しい謠言であります。多少心ある者は、一笑に附して顧みざるべきほどの無稽の言葉であるにかゝはらず、それを信ずるものが少くなかつたといふことは今も昔も變ることがありません。踊りに行くものよりは信心に行く者が多くなつて、相當の身分あり財産ある者が續々として詰めかけるやうになつた時分の事であります。

例の道庵先生が、この事を洩れ聞くと小膝を丁と打ちました。

「さあ、また乃公の出る幕になつた」

そこで近邊に住む子分達に觸れを廻し　馬鹿囃の一隊を狩集め、なほ有志の大連を差加へて小金ヶ原へ乗込み都鄙の道俗をアツと云はせようとして、明日あたりは其の下檢分に小金ヶ原まで出張して見ようか知らんと思つてゐた處へ、宇治山田の米友が訪ねて來ました。

「先生」

「やあ、珍物入來」

さすがの道庵先生が舌を卷いて額を逆に撫で上げました。

「どうも暫らく御無沙汰をしました」

「いやはや」

道庵は額を逆に撫でゝ米友の面を見ながら、いやはやと云つたのは、どういふ意味だかよく判りません。

「この頃は先生、おいらは目黒の方に行つてゐますよ」

「成程、お前さん、この頃は目黒の方におゐでなさるのかね」

「目黒の不動様のお寺に御厄介になつてるんだが、先生、近いうち旅立をするんで、旅の用意の藥を些とばかり貰ひに來た」

「左樣ですか、よくお出でなさいましたね」

道庵は忌に御叮嚀な挨拶をして米友をながめてゐます。

「此の中へ一つ詰めてお貰ひ申したいんだ、なあに近所に醫者もあるにはありますがね、素性の知れた醫者の方が安心だから、それで吉坊主にことわつて、わざ／＼先生の處まで貰ひに來ました」

と云ひながら米友は懷から黑塗の四重印籠を二組取り出して道庵の前へ並べました。

「成程、近所に醫者もあるにはあるが、素性の知れた醫者の方が安心だから、それで吉坊主にことわつて、わざ〳〵この長者町の道庵先生までお運び下し置かれたと云ふわけたね、それはそれは痛み入つた事た、難有くお請をして、早速、藥は調へて上げるが米友、もう少し前へお出で」
今日は道庵の猫撫聲が大へんに氣味が惡いのです。米友に取つては女軽業のお角といふものが苦手であるとは違つた呼吸で此の道庵も亦苦手であります。道庵に頭からケシ飛ばされる時も米友は面食つてしまうが、斯うして猫撫聲で出られる時も氣味が惡くて堪まらない。もう少し前へお出でと、云はれて、米友が妙にハニカンでゐると道庵は、
「藥の事は、藥で確かに承知致したが、お前に少々物の云ひ方を敎へてやるから、もう少し前へ出て、おいで」
何でもない事ですけれども、さういふ事が氣味が惡いから米友は、あまり道庵の家へ寄りつきません。道庵を恩人だとも思ひ、醫術にかけてはエライ處のある先生だと信じてはゐながらも、米友が道庵に懐かないのは、いつも斯うして米友を苦しがらせては喜ぶと云つたやうな人の惡い處があるからです。
「お前、今、何と云つた、目黒から出て來たが、近所に醫者もないではないが、素性の知れたのがいゝから、其れで此の道庵まで尋ねて來たと斯う云つたね、お前と、おれの中だから其れでもいゝけれども、他のお醫者様の前へ行つて、そんな事を云はうものなら、ハリ倒されるよ」

「其りやどういふ譯だらう」
米友自身では、誰に向つてもハリ倒されるやうな事を云つた覺えはないのです。こゝの先生に向つて云ひ得べき事は、よその先生に向つても云ひ得ない筈はないと思ひました。また人によつて言を二三にするやうな米友じやあ無えと腹の中は不平でしたが、道庵に向つては口を出して啖呵を切るわけには行きません。
「如何いふ譯といふことは無からうじやねえか、よく考へて見な、お前は目黒から來たと云つたらう、目黒はそれ筍の名所だらう、筍はお前何處へ生えると思ふ」
「そりや先生、筍は竹籔の中へ生えるに定まつてらあな」
「それ見ろ、つまり目黒は籔の名所だらう、その籔の中から出て來た癖に、近所に醫者もあるにはあるがとは道庵に對して隨分失禮な言分じやねえか、忌やに當つこするじやねえか、その位なら何も最初から、先生、わたしも此の頃目黒に居りまして、近所に籔もあるにはありますが、同じ籔でも長者町の籔の方が氣心が知れて安心だから、それで、わざ〳〵やつて參りましたと、ナぜ素直に云はねえのだ、それを忌やに遠廻しに近所に醫者もあるにはあるが、わざわざ來てやつたと恩に着せるやうに云はれるのが癪だあな、お互に斯う云つた氣性だから、物を云うにも齒に衣を着せねえやうにして交際はうぢやねえか」
實に下らないこぢつけです。あんまりな云ひがゝりです。それを眞面に受けるのが米友の米友た

る所以で、

「先生、そ、そんな譯で云つた譯ぢやねえんだ、近所に籤があるさいふやうな、そんな當つこすりで云つた譯じやねえんだ、籤なんぞは目黒でなくつたつて幾らもあらあな」

「偷ほ可けねえ！」

道庵が兩手を差上げたから米友の開いた口が塞がりません。

けれども籤爭ひはそれより以上に根が張らず、道庵はいゝ加減にして米友の爲に二箇の印籠へ充分に藥を詰めてやりました。さうして一體、旅へ出かけるさいふのは何處へ出かけるのださ尋ねるさ米友の云ふ事には、此頃、下總の國の小金ケ原さいふ處へ山師が出て、目黒の不動様のお札を撒き散らしたり、荒人神のうつしを持出したりするさいふことだから、三佛堂の役僧さ講中の重なるものさが、それを取調べの爲に小金ケ原へ出張する事になり、その歸りには佐倉、成田の方面へ廻るさいふ事で、今目黒の不動様に厄介になつてゐる米友が、その附人の一人に選ばれたさいふ次第です。

それを聞くさ道俺が珍重がつて、丁度、その小金ケ原へは自分も一つ下檢分に行つて見たいさ思つてゐた處だから、お前が行くならば一緒に行かうさ乘氣になつてしまひました。

そこで米友は藥を貰つて一旦、目黒の不動院へ立ち歸る。發足は其の翌日未明さいふことに定まつてゐて、道庵の一行は上野の山下で不動院の一行を待ち合はせ、そこで相共に小金ケ原まで乘込まうさいふ事に相談が定まりました。

翌朝、道庵は、いつぞや伊勢參りに連れて行つた仙公さいふのを一人だけ引具して山下に待ち合はせてゐますさ、間もなく不動院の一行がやつて來ました。

この一行が千住の小塚原に着いた時分も朝未明でありました。

何氣なく來て見るさ千住大橋あたりからお仕置場あたりまで押し返されないほどの人出です。ゑいじやないかの踊りがある。木遣くづしのやうな音頭がある。一天四海の太鼓の音らしいのも聞える。思ふに此の夥しい人數は昨夜一晩、踊つて踊り拔いてまだ足りないで此處まで練つて來たものらしい。出かけた先は、やはり下總の小金ケ原でせう。小金ケ原から踊り出して小塚原へ來るまでに夜が明けてしまつたさ見える。夜が明けても彼等の踊り狂ふ熱は醒めない。この分では江戸の町中を踊り拔いて、また日が暮れて夜が明けるまで踊り拔くのかも知れません。

不動堂の一行も、道庵先生の一行も、此の人數をどうする事も出來ません。さても正面から行つては、この人數を押し破つて通るさいふわけには行きません。さりさて、行手は千住の大橋で、川を徒渡りでもしない限り裏道を通り拔けるさいふわけにも行きません。已むことを得ずしてお仕置場の中へ避けて此の人數をやり過ごさうさしました。踊り狂つて行く連中の外に此の時分になるさ夥しい見物人です。

あさから、あさからさ續く人數の眞中に馬に乘せられた偶像がたつた一つある。

それは偶像ではない、たつた一人の小坊主が此の人數にも餘り驚かない溫良な黑馬に乘つかつて悲しさうな面をして人波に捲かれてゐることです。

その小坊主は、誰が見ても盲目で、お負けに身體よりも大きな笈を脊負つてゐることが如何にも不釣合です。この小坊主だけが、如何して馬に乘つてゐるのだらう。馬に乘つてゐるといふよりは、見た處、無理矢理に馬へ擡きのせられて、それを取り捲く群集が山車の人形のやうに守り立てゝ山の上まで持つて行かうといふ勢ですから、小坊主は騎虎の勢で下りるにも下りられず、云ひ譯をしても、この騷ぎで聞き入れられず、是非なく多數に擁せられて行く處まで行かうといふ氣になつてゐるものゝやうです。

周圍の人々が熱しきつて氣狂ひ染みてゐるにかゝはらず、この小坊主だけが、泣くにも泣かれない面色を遠くから見ると、丁度、處が千住の小塚原であるだけに、さながら屠所の歩みのやうな小坊主の氣色を見ると、いかにも物哀れで、群集の熱狂が此れから何をやり出すのだか心配に堪へられない事共です。

「皆さん、此處は何處でございます、もう此の邊で卸して下さいまし」

馬上の小坊主は泣くが如く訴ふるが如く斯う云ひますと、

「此處は、また江戸の取付き、千住の小塚原だよ」

と馬側から答へる者がありました。

「えゝ、小塚原ですつて、あ、そんなら皆さん、此處で卸して下さいまし」

馬上の小坊主は聲を振り絞りました。

「また〳〵、小石川の傳通院までは、なか〳〵の道のりた、もう少し乘つておゐでなさい、傳通院の御門前までは是非々々送つて上げますからね」

馬側から、また斯う云つて叫ぶ者がありました。

「いゝえ、もう此處で宜しいのです、こゝが小塚原とお聞き申して見ますと、わたくしは此處を乘打ちが出來ないわけがあるんでございます、もし、もう、此の邊がお仕置場でございませう、わたくしは此處でお地藏樣へお禮をして通らなければならない譯があるんでございます」

小坊主は誰が何と云つても此處で下りようとしました。

やがて、その大きな笈を脊負つた小坊主が馬の脊から下りて小塚原のお仕置場の高さ八尺の石の地藏尊の前へ、やう〳〵這ひついた時にそれを見た宇治山田の米友が、

「ありやあ、淸澄から來た辨信だ」

疲れきつてゐる辨に重たさうな笈を脊負つた辨信は、やう〳〵に地藏尊の前へ、のたりつくと共處へ平伏してしまひました。寧ろ、その重い笈の爲に、つぶされてしまつたやうです。

それを見た群集は、あわてゝ辨信を引起して、またも馬上へ運ばうとしますと、辨信は力なき聲をふり上げて、

「何卒、もうお赦し下さいまし、わたくしは疲れきつてしまつたから、もう馬に乗るのは忌でございます、何處ぞへ暫らく休ませて下さいまし」

辨信は、再び馬に乗せられるのを頻りに忌がるのに、多數の者は、

「もう少しだから、辛抱なさい、お前さんが御本尊だ、御本尊が馬の上にござらないと、踊る人が張合がない、傳通院まで送つて上げるから是非共辛抱なさい」

辨信を無理矢理に馬の脊へ搔き乗せようとする、それを辨信は頻りに忌がつてゐるのです。あれほど疲れてもゐるし、忌がりもするのを、何だつて多數して擔ぎ上げようとするのだか、それが、いよ〳〵わからないから、米友は人を搔きわけて、ずつと傍へ寄りました。米友が人を搔きわけて行くと、その傍にゐた道庵も、こいつはまた變つてると思つて、拔からぬ面をして米友に喰ついて行きました。

「おい〳〵、お前は辨信さんじやねえか」

斯う云つて米友が言葉をかけると、辨信が

「はい〳〵、あなたはどなたでございましたか知ら」

「俺等は米友だよ、友造だよ」

「あゝ、友さんでございましたか、その後は御無沙汰を致してしまひました、お前さんもお壯健で結構でございます、わたくしも亦、あれから、お前さんと別れましてからは、下總國小金ケ原の一月寺といふのへ行つて居りましたが、一月寺に居りますうちに、わたくしは清澄の茂太郎と一緒になりました、あなたにも一度お消息をしようと思つてゐるうちに、つい御無沙汰になつてしまひました……」

この塲合に於ても、お喋り坊主の辨信は一別來の一伍一什を喋り出さうとするから、米友も堪り兼ねて、

「辨信さん、御無沙汰どころじや無からうぜ、お前は今、弱りきつて死にかけてるじやねえか、一體、そりや如何したんだい、大きなものを背負込んで死にかけてゐながら御無沙汰でもなからうじやねえか」

「えゝ、その通りでございます、友造さん、わたくしは御覽の通りに弱りきつて居ります、死にかけてゐるんでございます、どうか助けてお呉んなさいまし」

「どうしたんだ、一體、わけが判らねえや、どうして助けりや可いんだ」

「友造さん、わたしは、もう馬に乗りたくないのでございます、わたしを助けて下さらうと思つたら、わたしを馬に乗せないやうにして戴きたいのでございます、馬に乗せないで、この笈物のお守をしながら何處かそこらで、ゆつくり休ませて戴きたいんでございます、皆さんが無理矢理に、わたしを馬に乗せて踊つておゐでなさらうとするが、私はもう忌でございます、この上、馬に乗せられると私も死んでしまひます、脊中の笈物も死んでしまひます、どうか、お助けなすつて、

私を此の上馬に乘せないやうにして下さいまし、お願ひでございます」
そこで米友が、いよ〳〵判らなくなつてしまひました、判らないけれど、さし當つての急務は、此の小坊主を馬に乘せないで、何處かへ靜かに休息させてやれば宜いのだと思ひました。
そこで米友が、大勢を相手に其の掛合をしようといふ氣になつてゐると、
「成程……」
米友の背後から圖拔けて大きな聲を出して「成程！」と云つて人を驚かしたものがありました。
一同がその聲に吃驚して見ると、それは別人ならぬ道庵先生です。
「こりや可けねえ、お前達は、此の盲目の坊さんを人身御供として無理矢理に馬に乘せて引張つて來たんだらうが、見た通り弱りきつて疲れ果てゝゐるのを此の上、馬に乘せようとするのは慘酷じやねえか、昔、神田の祭禮の時に馬鹿な奴があつて、素裸へ漆を塗つて生きた人形になつて山車へ乘つかつて、曳かれる者も得意、曳く者も得意でゐた處が、いゝ加減引つぱつてから卸ろして見ると其の人形が死んでゐたといふ話があらあ、この坊さんだつて、もう二三丁も馬に乘せて行かうものなら往生しちまわあ、幸道庵が通りかゝつた以上は、商賣の手前見殺しには出來ねえ、この小坊主は暫らく道庵が預かつて療治を加へてやつた上、改めてお前達に引き渡すから、お前達、暫らくの間、こゝで踊つて待つてゐろ、此の小塚原の亡者連が浮び出すほど踊つて待つてゐろ……處で一體、お前達は無暗に踊つたり跳ねたりしてゐるやうだが、踊りのこつといふものだ知つてゐるのか、それとも知らずに踊つてゐるのか、恐らく知つちやあゐめえな、自分から斯ういふと口幅つたいやうだが、日本廣しと雖も馬鹿囃子にかけちやあ當時下谷の長者町の道庵の右に出でる者があつたらお目にかゝる、この道庵の眼から見れば、お前達の踊りなんぞは甘めえもので、からつきし、物になつちやあゐねえ」
石の地藏尊の臺座の上に突立つて、いつぞや貧窮組の先達氣取で演說をはじめた道庵が、飛んでもない處へ脫線してしまひました。
實際、馬鹿面踊りの極意に達してゐる道庵の眼から見れば、小金ケ原の場末から起り出した不統一な雜駁な出鱈目な此輩の連中の踊りつぷりなんぞは、見て居られないのかも知れません。
さうだとすれば、道庵が思はず義憤を發して此の衆愚を啓發してやらうといふ氣になつたのも無理のない處があります。
「抑々、馬鹿囃のはじまりは伊奈半左衞門が、政略の爲にやつたといふことになつてゐるが、道庵に云はせると左樣で無え、ちうこうになつて雲州松江の松平出羽守、常陸の土浦の土屋相模守、美作勝山の三浦志摩守と云つたやうな馬鹿殿樣が力を入れて松江流、土屋流、三浦流といふ三つの流儀をこしらへたが、馬鹿囃の本音はトテも殿樣のお道樂では出て來ねえ、つゞいて旗本の次男三男のやくざ者が深川囃といふのをこしらへると、本所に住んでゐたのらくら者の御家人が負けない氣になつて本所囃といふのをこしらへやがつたが、やつはり馬鹿囃の本音は生白い旗本や

御家人の腕では叩き出せねえから間もなく元へ歸つてしまつた、處で、その元といふのが舊來の鐔江流の五囃だが、道庵に云はせると、こいつもまた不足がある、處で……」

道庵は得意になつて馬鹿囃の氣焔をあげはじめました。この塲合に於てお喋り坊主以上のお喋りがはじまりさうだから、氣の短い米友が靜止としては居られません。

「先生、いゝ加減にしねえと、この坊さんが死んぢまうぜ」

「あ、さうだ〳〵、馬鹿囃より人の命が大事だ、大事だ」

道庵は、あわてゝ地藏の臺座の上から飛び下りて、米友と力を合せて辨信を笈ぐるみ荷なつて近い處の休み茶屋に擔ぎ込みました。

道庵が、お喋り坊主を休み茶屋の中へ連れ込んで療治を加へてゐる間、外に立つてゐる群集は相變らず踊り狂つてゐたが、暫らくして頻りに、その偶像を返されんことを要求します。

「坊さん歸してもゑいじやないか〳〵」

休み茶屋の周圍を取り卷く事の體が最初から穩かではありません。處で跳り出した道庵が公衆の眼の前へ現れて、

「さあ、お前達、あの小坊主にいろ〳〵と療治を加へて見たが、少くとも尙ほ三日間は安靜に居らしむべき容態である、今、動かしては命があぶない、と云つてお前達も折角、こゝまで引出した人形なしには旨く踊れまい、そこは乃公も察してゐるから相談づくで新しい人形を一つお前達に貸してやる、これは鎌倉の右大將米友公といふ人形で、形は小さいが出來は丈夫に出來てゐる、只今のお喋り坊主と違つて、些とやそつといぢくつた處で破損をする代物ではない、その代りいぢくり方が惡いとムクれ出す、ムクれ出した日には、ちよつと手がつけられない、そのつもりで此の人形を傳通院まで貸してやるから、此れを小坊主の代りに馬の上へ乘つけて踊れ〳〵」

お喋り坊主の代りに道庵が提供したのは鎌倉の右大將米友公と云つたけれども、實は宇治山田の米友の事であります。いつの間にか道庵が米友に因果をふくめて、盲法師の身代りとなるべく納得せしめたと見えて、米友は甘んじて彼等の偶像とならうとするものらしい。併し、米友は正のまゝでは其處へ現れて來ませんでした。何處にあつたか天狗の面をかぶつて、頭へは急ごしらへの紙製の兜巾を置き、その脊中には前に辨信が脊負つてゐた笈をやはり頭高に脊負ひなして、手には短い丸い杖を持つて現れたから其れを金剛杖だと思ひました。さうして誰一人米友だと氣のつく者はありません。

「大山大聖不動明王！」

群集の中から喚と鬨の聲を揚げるものがありました。

「南無三十六童子、いけいら童子、うはきや童子、はら〳〵童子、らたら童子」

と相和するものもありました。

要するに此の塲は纏つたものでありさへすれば宜いのです。何とか納まりさうな人形を提供して

馬に乗せさへすれば宜かつたから、天狗の面が圖に當りました。

「大山阿夫利山大權現、大天狗小天狗、町内の若い者」

そこで米友が馬に乗ると、彼等は以前に、凋れきつた小坊主を無理矢理に人形に奉つて來た時よりは一層の人氣を加へて、再び踊り熱が火の手を加へて、

「大山大聖不動明王、さんげさんげ六根清淨、さんげ〱六根清淨」

斯うして新手を加へた踊りの一隊は、小塚原を勢よく繰出しました。

「鎌倉の右大將米友公の御入り」

聲高らかに呼ぶ者があると、

「賴朝公の御入」

と譯わからずに同ずるものもありました。これが小塚原を繰出すと、行く〱箕輪、山谷、金杉あたりから聞き傳へた物好連が面白半分に潮の如く集まつて來て踊りました。その唄と踊りの千差萬別なることは名狀すべくもありません。大山大聖とあがめまつるものもあれば、鎌倉の右大將だといふ處から鎌倉ぶしを謠ふものもある、木遣を自慢にうなるものもある、一貫三百を叩き出すものも有らうといふ景氣は到底人間業とは見えませんでした。

この噂が程遠からぬ吉原の廓へ響くと、吉原の有志は、どう考へたものか、ぜひ、道を枉げて、その一隊に吉原へ繰込んでいたゞきたいといふ交渉であります。



ずつと傳通院まで乘込む筈であつたのを、吉原遊廓の懇望もだし難く、大山大聖が、しばらく其處へ駕を枉げる事になりました。吉原では大樽の鏡を抜いて此の一行を持てなします。お賽錢が雨の降るやうです。

こゝで暫らく休んで、いざ出立といふ時に、米友の馬側に二人の童子が立ちました。その一人は金伽羅童子、一人は制陀伽童子、二人共に繪に見る通りの假裝をして、これから大聖不動の馬側に添うて何處までも御伴を仕らうといふ氣色です。

宇治山田の米友が心中の大迷惑は察するに餘りあることで、米友としては面白くも何でもなく、辨信の身代りの爲に、しばらく犧牲となつて馬上に忍び、小石川の傳通院とやらへ一先づ送り込まれてしまへば其れで一通りの義務は濟むものと思つてゐたのだから、道草を食はずに早く傳通院へたどりついて假面を取つてしまひたいのだが、先づ以て吉原の信心家へ招かれて退引のならなくなつたのが小面倒の起りです。

彼等は此の踊りの一行が世直しの大明神の出現だとでも信じてゐるらしい。殊に一行の本尊樣に祭り上げられてゐる馬上の偶像に向つては、正眞の大天狗が天降つたものとでも思つてゐるのか知らん。その持てなし方は有難いのが半分、面白がりが半分で、やたらに崇め奉つて、これから到る處、そのお立寄を願ふ事になりさうです。お立寄を請はれる爲に踊り子の連中には相當の振舞があるにはあるが、いよ〱大迷惑なのは米友です。

兩側の家から紙に捻つたお賽錢を投げるのが誰を目的であらう筈はない。皆んな米友の身體を目がけて投げられるのだから、

「痛エやい」

米友はムキになつて痛がつてゐる處へ、馬の側に立つた二人の童子は、ヒユー〳〵ヒヤラ〳〵と節面白く横笛を吹きはじめました。其の笛の調べが實に旨い、踊の連中は、その笛の音でまたいい心持に踊り出しました。

その時、一方、吉原の廓内では、思ひもかけぬ天上から、ひら〳〵と落花の舞ふが如く幾多の紙片が落ちて來るから、或者は欄干から手を伸はし或者は屋根へ上り、或者はまた物干へ驅け上つて、その紙片を手に取つて見ると、それは何れも、あらたかな神佛のお札であります。にはかに押し戴いて神棚へ上げるやらお神酒を供へるやらの騷ぎとなりました。

どうしても此れには何か黒幕が無ければはならない事です。

それから後、嘗て貧窮組が起つた時と同じ傳染作用が江戸の市中に起りました。前の時は不得要領な貧民共が寄り集つてお粥を食つて食ひ歩いたのだが、今度は無暗に踊つて踊り歩くのです。甲の町内で阿夫利山の木太刀を擔ぎ出すと、乙の町内では鎭守の獅子頭を振り立てるものがあります。山伏體の男を馬に乘せて法螺を吹かせて押出すのもあります。貧窮組が不得要領であつた如くに、此の踊りの流行も不得要領です。ひとり馬に乘せられた天狗の面は必ずしも最初の目的通り傳通院へ送り込まれるものとは限りません。調子に乘つて此處を振出しに江戸八百八街を引き廻されることになるかも知れません。

金伽羅童子、制陀伽童子が笛を吹いて行くと、揃ひの單衣を着た二十餘名の若い者が、團扇を以て、馬上の天狗諸共に前後左右から煽ぎ立てました。

その煽ぎ立てゝゐる揃ひの若い者の中を米友が見下ろすと、あつと意外に驚く人物が交つてゐたから米友はかぶつた天狗の面の中から其男を見つめました。

米友が驚いたその揃ひの若者の中の男といふのは、いつぞや本所の相生町の家で、米友の槍先にかけて、追拂つた浪人の中の一人です。

## 六

それとは別に小塚原のお仕置場の前の休み茶屋に收容されたお喋り坊主の辨信の枕許には道庵もゐれば清澄の茂太郎もゐます。道庵のゐる事は不思議ではないが、茂太郎は辨信が脊負つて來た笈の中から出たものです。

疲勞しきつた辨信は其處で前後も知らぬ熟睡に耽つてゐるが、さて道庵の身になつて見ると、小金ケ原の踊りは今やあゝして江戸の市中へ移つて來て見ると、これから小金ケ原まで視察に行くほどの必要もなく、また却て此の江戸の市中の此れからの騷ぎを見のがすわけに行かないから、

そこで辨信、茂太郎の徒をつれて引返すことに定めました。不動院の一行は兎も角、米友は道庵に托して置いて小金ヶ原へ出かけて一應の視察を試むることになりました。辨信と茂太郎とを駕籠に乘せて長者町の屋敷へ歸つて來た道庵、外して置いた門札をかけ返すと間もなく病家の迎へを受けたから早速出かけます。

辨信は一間のうちに死んだものゝやうになつて眠つてゐる。茂太郎は其の枕許についてゐながら退屈まぎれに庭を見ると、一叢の竹が密生してゐました。その竹を見ると茂太郎は笛が作つて見たくて作つて見たくて堪まらなくなりました。笛を作るには作りごろの竹であると思ひました。欲しくなると靜止としては居られないのが此の少年の癖で、さう〳〵庭へ下りて丁々と其の一本の竹を切つて取り、手際よくこしらへ上げたのが一管の一節切に似たものです。

それを唇に當てゝ、ひとり微笑んで思ふまゝにそれを吹鳴らして樂しまうとしたが、それでは折角寢てゐる辨信を驚かすことを怖るゝものゝやうに辨信の寢顏をながめました。

實際よく寢ることであると思はないわけには行きません。自分は、あの狹い笈の中へ押し込められて馬の脊に搖られ通して來たけれども眠いとも思はず、またさして疲勞も感じないのに、辨信さんの眠たいことゝ疲れつぷりは隨分ひどいと今更のやうにながめました。併し、自分は、海へもぐつても覺えのあることで人並よりはズンと息が長いのだし、一晩二晩寢なかつたところが何ともないやうに生れてゐるが、世間の人が皆んなさうではない。そこで、聊かでも辨信の安眠を妨げないやうに、自分も心置きなく暫くでも此の笛を吹き試みて遊びたいと云ふ心から、また廊下へ出て見ました。廊下へ出て見た處で、やつぱり其の響きが辨信を驚かさうといふ心配は同じことです。

笛を携へて庭へ下りて、軒に立てかけた梯子を見上げると屋根の上高く櫓が組んであるのを認めました。

物干にしては高過ぎる、と思ひながら、あそこなら誰憚らず笛を吹いて見るに恰好だと思ひました。この櫓といふのは、道庵先生が鐚八大盡に對抗して馬鹿囃を興行する爲に特に組み上げた櫓の名殘であります。

茂太郎が屋根の上の櫓で、誰憚らず笛を吹かうと上つて見た處が、大盡の御殿の廣間に、多數の人が集まつてゐるのが、そこから手に取るやうに見下ろすことが出來ます。見れば、それは、やはり踊つてゐるのであります。しかも踊つてゐるのは何れも綺羅びやかな人ばかりであります。

さても踊ることの好きな國民かな、と、笛を携へた茂太郎が呆れて其の廣間の中をながめてゐました。

小金ヶ原から踊り抜いて來た連中は民衆の階級であります。彼等はのぼせ上つて處嫌はず踊るから、遂にはふん縛られたりするやうな事になる。こゝの中で踊つてゐる連中は、どんなに間違つ

ても縛られることはないから、男と女とが抱合つたりなんかして盛んに踊つてゐるのであります。われら笛吹けども踊らずと、昔の人は云ひましたが、笛を吹かないでも、この位、内と外とで踊れは充分だらうと思はれます。茂太郎はそれを見てゐると、皆んな立派な人達が、いゝ年をして、どうしてまた、あんなに食ひついたり抱き合つたりして、臆面もなく踊れるのだらうと思ひました。

けれども、此の人達は、彼の民衆階級のするやうに決して無暗に馬鹿踊をする譯ではありません。斯うして出來た入塲料を皆んな慈善事業に寄附しようといふ非常に高尙な目的でやつてゐるのですから、食ひついたり抱き合つたりして踊つたりした處が、その性質が自から違つてゐることを茂太郎は知らないから、たゞ笛を携へて頻りにながめてゐるばかりです。

さて、こゝで一つ笛を吹いたら、たしかに彼の人達を驚かすことは出來ると思ひました。人を驚かす爲に吹きに來たのではなく、人を避けんが爲に吹きに來たのだけれども、斯うなつて見ると茂太郎は踊つてゐる大盡の家の綺羅を盡した紳士淑女の爲に吹いてやりたい心を起しました。取り敢ず何を吹いてやらうと歌口をしめしながら暫く小首を傾けて居りました。

何を吹き出さうかと思案してゐる茂太郎の目の前を二羽の鳩が飛んで行きます。それを見ると茂太郎は急に笛を取り直して、ヒユーヒヨロ、と吹きました。

その笛の音につれて不思議な事に飛んで行かうとした二羽の鳩が　急に翼を飜して櫓の上へ戻つて來ました。

つゞいて茂太郎が笛を吹くと、何處にゐたともない多數の鳩が、土藏の鉢卷の裏や、屋根の瓦の下や、軒の間から姿を現はして、茂太郎の立つてゐる櫓の上へと集まつて來るのが、いよ〳〵不思議です。

茂太郎は、足拍子面白く、なほ吹きつゞけてゐると集まつた鳩が、左右に飛び惑うて、さながら踊を跳るが如き形が妙です。さうして或者は茂太郎の肩につかまつて、また離れ、或者は茂太郎の周圍をめぐりめぐつて戯れ遊ぶものゝやうです。

いよ〳〵吹いてゐる間に、雀も集まります、烏もやつて來ます。茂太郎の傍にあつて舞ひ踊るのは鳩だけであつて、その他の鳥は屋根の鬼瓦や、棟の上に集まつて、首を揃へてそれを見物するかの如き形がまた頗る妙なものであります。

と、また、庭に餌を拾つてゐた鷄が頻りに羽バタキをしました。高く櫓の上まで飛び上がらうとして翼の力の足らぬことを、もどかしがるやうに、居たり立つたりしてゐる鷄も可笑しいが、つひには例の梯子を一歩一歩と鷄が上つて來る有樣です。見てゐる間に櫓の上は無數の鳥で一パイになりました。

表を通る人は足をとゞめて、此の家の屋根の上を見物します。裏の大盡の家の庭でも廣間でも此の事の體を認めないわけには行きません。

「茂ちやん、お前、また笛を吹くと人騒がせたよ」

眠つてゐたと思つた辨信が下の庭から言葉をかけました。

話が前に戻つて、小金ケ原から繰出して來た人數を淺草廣小路でながめてゐる山崎譲と七兵衞、

「えらい景氣だな」

「えらい景氣でございます、けれども、上方のゑいぢやないかは是れどころではございませんな」

「左樣、あれに比べると、また此方の方が穩かだな」

「一體、近頃は關東よりも上方の方が人氣が荒くなりました」

「さうかも知れない、一體、あのゑいじやないか騒ぎは何處から起つたものだ」

「何處から起つたか存じませんが、神樣のお札が天から降つて來たのが初まりださうでござんすよ、それで忽ちあんな事になつてしまひました、盆踊りのやうに時を定めて踊るんなら宜うございますが、朝であらうが晝であらうが、稼業が忙しからうが、忙しかるまいが踊り出したが最後、氣狂ひのやうになつてしまうのですから手がつけられません。私は、あれを伊勢から伊賀越をする時に見物致しました、男だけならまだしも、女が大變なものですからな、女が白晝裸で踊つて歩くんですから、沙汰の限りでございます、どうも人間て奴は、あゝして集まつて人氣が立つと、逆上せあがつて人間が別になつてしまうんですね、江戸へは、あんなものを流行らせたくないものでございます」

「さうだ、流行りものとなると、人氣が丸つきり別になつてしまうんだ、今時の攘夷と云ふ奴もそれと同じで、その事が出來ようと出來まいと其れを云はなければ人間でないやうに心得てゐる、流行り物といふ奴は全く厄介物だな」

「上方ばかりじやございません、先生のお國の常陸の筑波山あたりでも昔は隨分あゝ云つたものが流行つたといふ事でございますね」

「古いことを擔ぎ出したものだな、あれは歌垣と云つて、やつぱり男女入り亂れて踊るんだ、隨分、如何はしい話もあるが、今の流行りものよりは幾分か風流だらう」

「伊勢の國には、またつと入といふのが有りましてね、大勢して踊り歩いて、日頃、大事なものを隱して置く家の前へ來ると、つゝと入りこんで、その大事なものを取り出して見るのですが、大事にしてゐる娘や、お妾さんを見られて弱る者があるさうです」

「武州の府中の六所明神の提灯祭は一定の時になると町といふ町の燈火を殘らず消して、集まつたものが入り亂れて踊るのださうだが、お前行つて見たか」

「えゝ、行つて見たこともございます」

「人間は踊りたがるやうに出來てるんだ、それが男だけでは熱が出て來ないんだ、女が出て踊るやうになるから熱が出て逆上せあがつてしまうのだな」

「さうですとも、上方で見ました時に、女が裸で踊る有樣と云つたら、とても見られたものじやありませんでした、女は餘り人中へ出て踊らない方が宜うござんすな、尤も、踊りも優美な品のいゝ踊りなら隨分結構でござんすけれど、ゑいじやないかの踊りばかりは感心しません、西洋の國ではエライ身分の人達までが夜會といふことをして男と女と夜つぴて踊るんださうですが、日本の土地にも其の眞似が流行つたんでございませう、世が末になるとロクな事は流行りません」

「誰か裏にゐて煽てる奴があるんだよ」

七兵衞と山崎とが、こんな話をしてゐる處へ、人混みの眞中に揉まれて馬に乘つた天狗の面が現れて來ました。

「あれた、あゝいふ木偶の坊を祭り上げて、いゝ氣になつて騒いでゐる」

二人は馬上の人身御供を苦々しげに、また笑止千萬な面をしてながめてゐます。

## 七

「左樣でございますね、何とも仰有つてお出でにはなりませんが、多分、本所の相生町の方へお出でになつたものと心得て居りまする、實は私も此の間、こちらへ御厄介になりました居候でございまして、また、先生の御氣象もよく呑込んでゐるわけではございませんが、うちの先生はなかなかちよくなお方でございまして、あれでまた中々物に憐れみがございます、わたくしと、もう一人の茂太郎といふのが居候をしてゐるのでございますが、まあ命の親と云つても宜しいのでございます、始終、お酒を飲んで冗談ばかり云つておゐでになりますけれども、お醫者の方は確かにお上手でございます、癒るものは癒る、癒らないものは癒らないとハツキリ仰有るのが何よりの證據でございます、人間業で癒るものと神佛の御力でなければ、どうにもならないものとの區別を先生は、あれでちやんと心得ておゐでになる處がエライものと、わたくしは感心を致して居りますのでござします、本當の事を申しますと、人間といふものは決して病氣で命を落すものでございません、皆んな壽命でござゝます、前世の宿業といふものでございます、それでございますから世間にお醫者さんを信用し過ぎるものは、丸きりお醫者さんを信用しないものと同じことに間違つて居るのでございます、また、うちの先生は藥禮を十八文づゝと定めてお置きになります、これがケチのやうですけれども出來ないことでございます、もとくお醫者さんといふ商賣はそんなにお金の出來る商賣ではございません、お醫者さんで一代のうちに百萬圓ものお金をこしらへたりすると、その子供に良いのが出來ません、お醫者さんや坊主といふものは人の命を扱うものでございますから、出來るだけ綺麗に致してゐなければ人の思といふものがたかるのでございます、こんな事を申上げると迷信だなんぞとお笑ひになるかも知れませんが、それが本當の處でございます、たゞ、うちの先生に惜しいことはお酒を召し上がる事でございます、梵網經の中にも飮酒戒第二とございまして、酒は過失を生ずること無量なり、若し自身の手より酒の器

を過ごして人に與へて酒を飮ましめは五百世までも手無からん、況んや自ら飮まんをやとございます、その事を先生に申しますと、先生は、べらぼう奴、道庵が酒をやめたら天下が亂れるから、それで人助けの爲に酒を飮んでゐるのだと斯う仰有いますから、わたくしも二の矢が次げないのでございます、まあ、もう少し此方でお待ち下さいまし、わたくし共も實は茂太郎と二人で、まだ夕飯も戴かないでお待ち申してゐる處でございます、ナニ、もう御膳は出來て居りますのですけれども、先生より先に戴いては濟むまいと思ひますから、二人共にまだ夕飯を食べないでお待ち申してゐる處でございますが、いつお歸りになるかわかりませんから、これから、ちよつと用足しに出かけて參らうとする處でございます、何分よろしく」

お喋べり坊主の辨信は一息にこれだけの事を喋つて杖をついて道庵の屋敷を出かけました。

本所の相生町の老女の屋敷の中から琵琶の音が洩れ聞えたのは其の夕べの事です。聞き流して通り過ぎる人もあります。屋敷のうちにゐる娘達も、思ひがけなく其の音を聞いて珍らしがつて耳を傾けました。その琵琶の音は正銘の薩摩琵琶の音でありますけれども、聞く人は何だかわからないと云つてゐる人が多いやうです。

外に立つて聞いてゐる人の評判を聞くと、はじめは三味線だらうと云ひました。やがて三味線ではない琴だと云ひ出すものもありました。琴でもないと打ち消す者もありました。琴の曲彈をしてゐるのではないかと附け加へるものもあつたけれども、これが琵琶だと斷言したものは一人もありません。

「皆さん、御存知でもございませうが、あれは薩摩の國で流行ります地神盲僧の琵琶のうちの横琵琶といふものでございます、さうして私がそれを知つてゐるかと申しますと、私は平家琵琶を少しばかり心得てゐるのでございます、御承知の通り琵琶にも色々ございまして、妙音の琵琶、平家の琵琶、荒神の琵琶、地神盲僧の琵琶……名は色々でございましても、源は一つでございます」

寄つて集つて聞いてゐた連中は、思ひがけない處から一人の小坊主が飛出して、問はれもしない說明をやり出したのに驚かされました。

お喋り坊主は引つゞき海の中に漂ふ海月のやうに、小路の暗い處で法然頭を振り立てゝ、

「わたくしが琵琶を習ひはじめにお師匠さんが、薩摩の琵琶は斯うだと彈いて聞かせて呉れました、あの國では、おさむらひ達のうちに專ら琵琶が流行しまして、二本差して琵琶を脊負つて歩く人が多いさうでございます、それで薩摩の國の琵琶はおさむらひ風の勇ましいものでございます、私共が習ひました平家琵琶とは、なかなか趣が異つたものでございます、けれども源は皆んな一つでございまして、やはり、薩摩の琵琶も地神盲僧から出たものでございますから、わたく

しが斯うして耳を傾けて聞いて居りまするさ、成程さ思ひ合はせるこさが多いのでございます、エ、地神盲僧さは何たさ仰有るのですか、地神の地の字は天地の地の字を書くのでございます、神は神樣の神さいふ字、盲僧の盲は盲目でございまして、僧は出家の僧でございます、地神さいふのは地の神樣、盲僧さいふのは私共見たやうな目の見えない坊主のこさでございます」

お喋り坊主が斯う云つた時に、人々は、はじめて此の坊主は盲目であつたのかさ思つて其の面を篤さのぞき込みました。のぞかれても其れさ知る由もない辨信法師は聽衆が靜まつてゐるさ見てなほ其のお喋りをつゞけました。

「抑此の琵琶さいふものを初めましたのが天竺の妙音天でございます、妙音天が琵琶をお初めになつたのでございますが、この妙音天さいふお方も盲目であつたさうでございます、それでございますから、此の妙音天樣が地神盲僧の守り本尊になつてゐるのでございまして、私共も琵琶を彈きまする時は、その妙音天樣を本尊樣さ致します、また一說さ致しましてはお釋迦樣のお弟子の中に嚴窟尊者さいふ方がございました、この方が、やはり盲目でゐらつしやいました。處で、お釋迦樣が可哀相に思召されて、お前は目が見えないで可哀相である、その代り心眼を開くが宜しい、心眼を開いて悟に入れば、なまじい眼の見える爲に五欲の煩惱に迷はされる人達よりは遙に幸福であるさお敎へになりました、そこで嚴窟尊者が一心に修業を致されまして遂に心の眼を開くやうになりましたのでございます、いよ〳〵尊者が心眼をお開きになりました時に妙音辨才天が十五童子を引つれてお釋迦樣の御前で琵琶の妙音曲を嚴窟尊者にお授けになりました、その頃、中天竺に阿育大王さ仰有る王樣がございまして、そのお世繼が倶奈羅太子さ仰せられました、一國の太子さお生れになりましたけれざも、何の因果か此のお方が不圖お眼をおわづらひになつて、私共同樣の盲目の身さなつておしまひになりました、四海を治め給ふ御方でも、私共のやうな漂泊ひの小坊主でも眼が見えなくなりましては世間は闇でございます……」

「おや〳〵、雨が降つて來ましたぜ」

先程から怪しかつた空がバラバラさ雨を落して來たので集まつてゐたものが動搖めき渡りました。そこで盲目法師のお喋りも一段落になつて、濡れるを厭ふ人達は右往左往に馳せ出しました。

「もし、先生、長者町の道庵先生は、まだお屋敷にゐらつしやいますか、それさも最早お歸りになりましたか」

辨信の姿が表の門の處に現はれて案内を賴みましたのは、其れより後の事でしたけれざ、やゝ暫らくさいふものは返答がありません。返答がありませんでしたけれざ、自分の訪れは奥へ屆いたものさ信じて辨信は、それ以上には念を押さずに待つて居りました。果してバタ〳〵さ廊下を渡つて迎へに來た者があります。

「おゝ、あなたは辨信さんさ仰有るお方でしたか、あなたも琵琶をお彈きになるさうですね、只今、こちらにも琵琶のお上手な方がお出でになりました、道庵先生もそれをお聞きになつてゐら

つしやいます、是非、あなたも其の席へお出で下さるやうにと、先生も皆様もさう申してお出でなさいます、さあ、お上り下さいまし」

斯う云つて、わざ〳〵奥から辨信を迎へに來たのはお松であります。

「左樣でございましたか、實は私も只今外でお聞き申してゐた處でございました。それを聞かせて戴きますれば、私と致しましても願つたり叶つたりでございます、さういふ事でございますなら、好きな道でございますから遠慮なしに上らせていたゞきますでございます。

辨信は杖をさし置いて早や玄關へのぼつてしまひました。

やがて辨信が廣間へ案内されて見ると——辨信は盲目だから見るわけには行きません。

推量して見ると可なりの廣間に可なりの人が集まつて、琵琶を彈いてゐる人は、その廣間の眞中に居ることはわかります。だから自然聞く人は皆その周圍に端座したり柱にもたれたり、障子や唐紙をうしろにしたりしてゐるといふことがわかります。

辨信が招ぜられたのは例の道庵先生が控えてゐる其の次で、この際先生は謹聽してゐるのだか、それとも居眠りをしてゐるのだか、兎も角、尤もらしく下を向いて控えてゐました。

靜かに道庵の次へ坐つた辨信は、やはり前と同じやうに歌のない琵琶だけが老練な人の手によつて彈きこなされてゐるのを耳にします。それを聞いてゐると、彈いてゐる人の年頃もほゞ想像されます。決して若い人ではない、年齢に於ても可なりの老練家であり それで琵琶を彈く人であつて歌はない人だといふこともわかります。歌へないのではなく、歌ふ必要のない琵琶を彈くことを心得てゐるものゝやうです。辨信はそれを一層面白く思つて、いよ〳〵席を構へてほんたうに身を入れて、しんみりと聞かうとした時に、室の中程から立ちのぼる異樣な臭氣に打たれました。勘の鋭いやうに嗅覺も亦鋭敏であつた辨信は、それほど好きな琵琶の音をさへ打ち忘れて、その立ちのぼる異樣な臭氣に心を取られました。

「おや」

その時に琵琶の主が代りました。琵琶ばかり彈いて敢て歌はなかつた一曲はそれで終つて新に代つた人が同じ處へ坐つて徐に歌ひ出したのが「木崎原」の一段であります。席はいよ〳〵靜肅なものになりました。

薩摩の島津家に取つては「木崎原」の歌は大切な歌であります。藩主も此の木崎原を聞く時には端座して兩手を膝の上へ置いて謹んで聞くのださうです。それですから彈ずる人は無論の事、ここに集まるすべての人が、皆相當の敬意を表して、いよ〳〵席が靜肅なものになつたのでせう。ひとり、道庵先生のみは相も變らず、謹聽してゐるのか居眠りをしてゐるのか、わからない形で、尤もらしく下を向いて控えてゐることは前と同じです。見やうによつては下を向いて時々欠伸を噛み殺してゐるやうにも見える處が此の先生の持つて生れた人柄です。

木崎原の琵琶歌は島津家先祖の功業をうたふたもので、其の初段の歌ひ出しは斯ういふ文句であ

ります。

つら〳〵世間の現象を觀ずるに、積善の家には餘慶あり、積惡の家には餘殃あり、尤も愼むべきは此道也、こゝに薩隅日三州の太守、島津修理太夫義久と申し奉るは、うや〳〵しくも清和天皇の御苗裔、鎌倉右大將征夷大將軍、源賴朝公の御子、左衞門尉忠久公より十六代目の御嫡孫也、文武二道の名將にて、上を敬ひ下を撫で、仁義正しくましませは、靡かん草木はなかりけり、御舍弟には兵庫頭忠平公、左衞門尉歲久公、中務大輔家久公とて、何れも文武の名將なり、其の外家の子郞等に至るまで、皆忠勤を勵ませは、古今稀なる御果報、近國他國の者までも、羨まざらんはなかりけり……

こんな風に薩摩の國主の讃美歌になつてゐるのだから、苟くも薩摩の緣のあるものがこの歌を聞く時、多くの敬意を表さなければならないのは當然であります。

斯うして一座が水を打つたやうになり、歌ふ人の意義が、いよ〳〵昂づて、

彼の島津殿と申すは、かたじけなくも清和天皇の御末、多田滿仲よりこのかた、弓箭の家に譽を取り、政道を賢くし給へは……

といふ大干にかゝつた時に、最初から鼻をひこつかせてゐた盲法師の辨信が、いよ〳〵法然頭を前後左右に振り立てゝ、さながら見えぬ眼に何かを探さうとするらしき振舞のみが甚だ目ざはりです。

此の辨信も亦、自ら名乘る處の如く、上手か下手かは知らないが、かりそめにも其の道に心得のあるものだから、禮儀から云つても趣味から云つても、もつと溫和しくしてゐなければならない筈のが遂に堪まり兼ねると見えて、

「あ、もし、皆樣、折角の彈曲の間を大變に失禮でございますけれも、皆樣に申上げなければならないことが出來ました」

琵琶歌の半に、席の隅つ子にゐた見慣れぬ小坊主が叫び出したから、

「叱ツ」

叱りつけた者がありましたけれど、辨信はそれを耳にも入れないで、

「もし　皆樣、火藥の臭が致しまする、このお部屋の中に烟硝の臭が致しまする」

云ひも終らぬ時に轟然たる響きと共に此の一室が裂けて飛んだかと思はれる屋鳴震動です。靜肅な彈曲の半に思ひ設けぬこの出來事は一座のすべてを驚かさないわけには行きません。少くとも卅餘人は集まつてゐた勇士豪傑の驚き振がまた夫れ夫れ個性を發揮してゐる處が面白いと云へは面白いものです。或者は二三間飛び退いて太刀を拔かんと構へました。或者は下へつくはるやうにして、身を沈め乍ら敵の呼吸を見るやうな形であります、或者はまた列座のうちの少年をかこうて身を以て降りかゝる災難に當らうとするもあります。

けれども、誰一人、この思ひ設けぬ出來事の原因を知つたものはありません。謀叛人が此の屋敷

へ切り込んだといふわけでもなく、また謀叛が發覺して御用の手が混み入つたといふわけでもなく、たゞ一發の彈丸が――それも無論、大砲の丸ではなく小銃の彈丸が、つまり火鉢にかけた藥鑵の下から爆發して、この塲の空氣を斯くの如く破りました。

さりとて人命には露ほどの怪我はなく、犧牲になつたものと云へば火鉢の藥鑵があるのみです。けれどもたとへ、小銃の彈丸一發といへども在るべからざる處に在り、發すべからざる處に發したのは、どうしても由々しき出來事といはねばならぬ。

此の出來事の爲に、集まつてゐる人々の日頃の嗜みといふものが、露骨に現はされたことは一種の試驗といへば試驗のやうなものです。前に云つたやうな餘裕を見せたのは、さすがに見苦しくもありませんでしたが、中には正銘に狼狽して四つん這ひの形になつた者も無いではありません。殊に道庵先生の如きは、たしかに其れまで居眠りをしてゐたものと見えて、その響きが起るや否や脆くも引繰り返り、それも一つで濟むのを三ツ四ツ一度に宙返りをして廊下の隅へころがり出して腰を拔かした形などは醜態です。最初に警告を與へた辨信法師は、爆發起ると見るや衣の袖に頭を包んで、その塲に突伏してしまひました。

見上げたのは、木崎原の一曲を彈じてゐる琵琶の老手で、この不時の出來事の爲に、撥の撥きが少しも狂はず、歌ひかけた歌の詞に滯りがあるでもありません。大風の吹き去つたあとの枯野に端座してゐる心持で、從容としてその一曲を彈じつゞけてゐる形は見事といふべきものです。

そこで、一座の連中は忽ち、以前の通りに席に戻つて、身にふりかゝる灰神樂を拂はうともせずに、再び座を正して相變らず彈じつゞけてゐる木崎原の一曲に耳を傾けはじめました。

それですから爆發も、その爆發から起つた狼狽も、ほんの瞬時の光景で、席は以前と同じこその靜肅なものに返り、琵琶の彈者は一層の勇氣を以て首尾よく木崎原の初段を語り濟ましました。

その曲が終つた後に一同が初めて、ホツと息を吐いて、さて、今、起つた不意の椿事の原因如何にと、眼を光らした時に、犧牲となつた藥鑵をつるし上げて、莞爾として火鉢の灰を掻き均してゐるのが益光です。

一座の者の荒膽を挫いで興がる爲に、火鉢の中へ彈丸をうづめて置いたものがある。それが刎ね出した時に一座の狼狽ぶりを見て笑つてやらうといふ惡戯者があつたのだと思ひました。して、その惡戯者は誰であらう、多分、藥鑵をつるしてほゝ笑んでゐる益光の仕業ではなからうかと思ひました。

その塲は、これだけの惡戯で濟んだけれども、その翌日あたりから此の種類の惡戯を江戸の眞中に向つて試みて、市中の狼狽ぶりを見物しようといふ評議が此の物騷な屋敷の中で行はれるやうになると穩かではありません。

穩かでないのは此の屋敷に限つたことはありません。この頃、一體の世間がさうであります。いつも暢氣であるべき筈の長者町の道庵先生の屋敷までが、此の穩かならぬ雲行に襲はれてゐると

いふのは嘘のやうな眞實であります。先生は相變らずだが、その子分達が枕を高くして寢られないことがたつた一つあります。それは外でもない、洋行に出かけた鰡八大盡がいつ歸つて來ないものともわかりません。歸つて來れば必ず、これ見よがしのお祝ひが此の隣の御殿で行はれるに定まつてゐます。その際に於て指を啣へて見物して居なければならない事の殘念さを思ふと子分の者が躍起になるのも無理はありません。そこで、今のうちから、それに對抗する方針を考へて置かなければならないと、道庵の子分達が、夜の目も寢ずに苦心してゐる事の體は外の見る目も哀れであります。

## 八

染井の化物屋敷はまた化物屋敷で、神尾主膳はあの時の井戸釣瓶の怪我からまた枕が上がらないで、横になりながら焦れきつてゐます。眉間につけられた牡丹餅大の傷は瘉着したけれども、その見苦しい痕跡ばかりは拭つても削つても取れません。

さうして時々思ひ出しては齒噛みをして、

「あいつ、お喋り坊主は何處へ失せをつたかなあ」

取捉まへて八つ裂にしてやりたい程の口惜しがり方です。辨信の方にこそ怨みはあれ、神尾の此の體たらくは云はゞ自業自得に過ぎないのに、その逆さ怨みが、因緣づくと思はれるほどに骨身に食ひ入つてゐて、明暮、辨信を憎み憤つてゐたが、さて、その後、辨信は再び彼の土藏へは歸つて來ませんでした。辨信が歸らないのみならず、それと一緒に出た龍之助も、あれからまた再び戻つては來ません。お銀樣は、土藏の中に引籠つて針で血を刺してはお經を寫すことを以前のやうに繰返してゐるらしい。

或る夜、神尾主膳は囈言のやうに枕許にゐた福村を呼んで斯う云ひました。

「福村、この頃、毎夜のやうに此の屋敷へ狸が入り込むな」

「狸、そんな事はござるまい」

「夜中に眼が醒めると、狸の足音がする、耳を濟まして聞いてゐると離れの方へ忍んで行くやうだ、おれは、二晩まで其の足音を聞いた、此の調子だと今夜あたりもやつて來るぜ、取捉まへてやらうと思ふが、足音だけが聞えて、身體が利かぬ」

「それは穩やかでない、一體、狸の足音といふのを、どうして大將は聞き分けた、狸なら狸のやうに、若し人間であつたら人間のやうに、隨分打捨つちや置けねえ」

と云つて福村は今更のやうに離れの方を見ました。離れには例のお絹がゐます。

福村は氣をつけてゐたけれども、其の晩は狸の足音は聞えない代りに遠からぬ處で狸囃の音が起るのを聞きました。

其の翌日の晩も亦お囃子の音が賑やかに宵のうちから響き出しました。此屋敷の界隈でも例の蹄

りが流行り出したものです。

「五月蠅い百姓共だ、誰か行つてあれを差留めて來い」

神尾主膳は病床のうちで其のお囃子を焦れつたがつたけれども、外の連中は却つて其のお囃子で浮き立ちました。

踊りの同勢が此の化物屋敷の前へ來て、そこでまた盛んに踊り出してゐる時に、

「喧しいやい」

神尾だけが焦れてゐるけれども、その他の連中は面白がつて出て見ます。

離れにゐたお絹も亦、靜止(じつ)としては居られません。女中を連れて垣根から頻りに踊りを見物してゐたが、つひ面白さに釣り込まれて門の前へ出てしまひました。

「このお屋敷の中には、たしか八幡のお稻荷樣がありましたぜ、お稻荷樣の前で踊らせてもらひませう」

「さういふ事に願ひませう」

同勢は踊りの威勢で化物屋敷の中へ混み入つてしまひました。もとより形の如く荒れ屋敷ですから門と垣根の締りも嚴重といふわけには行きません。屋敷の中へ混み入つた同勢は、庭の方へと踊つて行き提灯をブラ下げて、ゑいや、ゑいやと踊りはじめました。

迷惑がつた連中も、實は其れが面白いので、大におだてゝ踊らせたい位であるが、神尾主膳は其



の物騒がしさを聞くと赫と逆上しました。

「誰にことわつて此の屋敷へ入つた、追ひ返せ」

ひとりで喚いてゐるけれども誰も相手にする者がありません。

繰込んできた同勢は手を取り組んで、こゝの木蔭や、彼處の築山の蔭で散々に踊ります。はじめのうちは頰冠りをしてゐる者も多かつたが、いつか知らずそれも脱けて落ちて、果ては自分の帶の解けて落ちたのを知らないで踊り狂ふ女もありました。

「お屋敷のお方も踊りなさい、皆さん一緒に踊りませう」

踊りの同勢は見物のすべてを踊りに卷込まずには置きません。それを卷き込んで行くから、おのづと同勢が殖えて行くのです。

「どうも御苦勞樣でした、また明晩も來て踊つて下さい、待つてゐますから」

夜明け近くになつて、踊りがいよ〳〵ハネようとした時に、お絹の挨拶が斯うです。たから忌やでも其翌晩、この踊りの同勢が繰込まないといふ限りはありません。果して翌晩また同勢が押寄せて來たには押寄せて來たが、驚かされたことには、その多數の人が悉く紙製の狐の面をかぶつて來たことです。

「これから王子の衣裳榎へ行つて踊ります、皆さん後から入らつしやい」

斯う云つて狐の面をかぶつた者共が、此の化物屋敷の前で、あつさり踊ると、今晩は屋敷の中へ

は入らないで行つてしまひます、多分これから王子の稲荷の衣裳榎とやらへ行つて散々に踊るのでせう。

その翌日になつて見ると大きな評判が立ちました。王子の稲荷の衣裳榎の下へ關八州の狐が悉く集まるといふ噂であります。それで十里四方から狐火が炬火のやうに續くといふ噂であります。それを見物せんが爲に江戸の市中をはじめ近在から集まる人が雲の如しといふ噂であります。遂には人と狐が一緒になつて踊り出し、人が狐だか、狐が人だかわからないで踊り出すといふ噂が一ぱいに廣がりました。

これに依つて見ると今年は確かに豐年である。斯うして衣裳榎へ多數の狐が集まるのは、それぞれの狐が皆官位を欲しがるからで、それと人間と一緒になつて踊るのは、人間も狐も共に有卦に入つたのだといふ縁喜のよい解釋であります。今夜はまた昨晩よりは一層盛んで、これから毎夜の如く人と狐の踊があるだらうといふ評判です。

化物屋敷の離れにゐたお絹は其の評判を聞くと、昨晩貰ひ受けた狐の面を取り上げて女中を相手にその話をしてゐたが、今晩は王子の稲荷まで出かけて見ようとの相談です。

お絹が王子稲荷の踊へ出かけるといふ話を聞くと、別段誘ひをかけたわけでもないが、化物屋敷に居合せた御家人崩れの連中が、我も々々とお伴を志願することになつた。此處から繰り出したたけでも十人餘りです。

して見ると、屋敷に殘されたのは、神尾主膳一人であります。彼等は主膳に酒を飲ませて置いて――ではない主膳が昨晩から酒浸りになつて、今は熟睡してゐるのを宜いことにして、體のいゝ置いてけ堀を喰はせて、皆んな出拂つてしまひました。斯うなると此等の連中は可なり薄情なものであります。

眼が醒めて神尾主膳は頻に水を呼びました。けれども水を持つて來るものはありません。返事をする者もありません。

神尾は病床で頻りに怒鳴りました。いくら怒鳴つても、今宵に限つて此の化物屋敷には人間一人ゐないのですから、神尾の怒鳴りも空雷に過ぎないのです。酒を多く飲めは酒亂の萠しがあり、今も飲んだ酒が醒めたといふわけではないのですから、主膳は赫と怒り一時に逆上せあがりました。

病床からよろ〳〵と這ひ出して、あぶない足を踏み占めると、長押にかけた槍を取卸ろしました。逆上すると槍を取るのが神尾の癖であります。

「騷々しいわい、者共、何が面白くつて踊るのだ」

槍をしごいて椽側から庭へ飛んで下りました。けれども、今宵に限つて誰もお危なうございますと云つて止める者はありません。荒れ出した神尾主膳は、この手槍で眞一文字に庭の石燈籠へ突掛けて行きました。それが眞面に石燈籠へ當つたら、槍の穂先もポッキリと折れるのでせうが、燈

籠の屋根の上を掠めて流れたから、そのハズミで主膳は石燈籠へブッつかつて撞と後へ倒れました。

神尾主膳は、起き上つて手近な植木を滅茶々々に突き立てます。主膳の眼には石燈籠も立木も皆んな人間に見えて當るを幸ひ、それを突き伏せてゐることに少からず痛快を貪つてゐるやうな鹽梅です。幸か不幸か、いくら荒れ狂つても相手が石燈籠であり植木であるから手答へはあつても手向ひはありません。それに、一家を擧けての留守と來てゐるから、荒れたい放題に荒れたところで、それを取押へようとする者がないから、神尾主膳は思ふ儘に其の酒亂と逆上とを發揮することが出來ました。さりとて、先方が全然無抵抗であるといへ、もと、人間の暴力には限りがあるものであります。放つて置けば自から疲れて暴力そのものが無抵抗の中へ沈沒してしまうに定まつて居ります。神尾は遂に綿の如く疲勞してしまひました。それでも、水が飲みたくなると共に井戸までのたつて行くの本能だけは殘つて居りました。

例の井戸の處までのたりついて行つて、無暗に水を汲み上げて釣瓶に口をつけてガブ〳〵と飲んでゐたが、いゝ加減飲むと共に、その殘つた水を頭からザブリと被り、

「あゝ、いゝ心持だ」

つゞいて釣瓶を繰り卸ろして汲み上げると共に、水をまた頭からザブリと被つて、

「何といふいゝ心持な事だ」

釣瓶を卸ろして二杯三杯汲み上げては、それを頭から被り、頭から被つてはまた汲み上げるのが、やはり正氣の沙汰ではありません。五杯も十杯も十五杯も汲んでは被り、被つては汲み、その度毎に、車井戸の車がけたゝましい音を立てゝ火の發するほどに軋ります。程遠からぬ庭の土藏の二階には、此の車井戸の音が大嫌ひなお銀様が、若しゐるならば、今頃も、たしかに血を刺してお經を書いてゐなければならない筈です。

その水を汲むたびに井戸をのぞき込むと神尾主膳は血管が裂けるほどに憤り出して、

「お喋べり坊主、出て來い」

と怒號します。主膳の眼には、たしかに此の井戸の底にお喋べり坊主がゐて減らず口を叩いて自分を、おひやらがしでもするものと見てゐるらしい。

「お喋べり坊主、貴樣の言草が今だに耳に殘って不愉快千萬で堪らぬわい、恐らく一生のうちに貴樣ほど不愉快な奴はなからう、貴樣の事を思ひ出すと骨から肉が浮び出すほど忌やになるわい、つべこべと尋ねられもしないお喋りを井戸へ投げ込まれてまで喋りつゞけてゐる聲が地獄の底から迷うて來たものゝやうに耳に殘つてゐる、思ひ出しても癇にさはつて堪まらぬ、貴樣を引出して骨も身も一度に擦りつぶして與れぬ上は、この癇が納まらないわい」

神尾主膳は斯う云つて地團駄を踏みながら頻りに水を汲み上げては被ります。その度毎に辨信に對する恨は骨髓に徹するものゝやうに身を戰かせるのであります。

果してお銀様は其の時、たつた一人で土藏の中でお經を寫して居りました。針で自分の肉體を刺して其の血で丹念に一字々々の法華經を寫して「我此土安穩、天人常充滿」といふ處に至つた時に車井戸がキリ〳〵と鳴り出したから、お銀様はゾッと身ぶるひをして筆を下へ置きます。

「お喋べり坊主」

神尾の世にも口惜しさうな聲がその忌な深夜の車井戸の響きと共にお銀様の耳朶に觸れると共にお銀様の眼前に現はれのは、そのお喋べり坊主の辨信の姿ではなく、甲州で酷たらしい虐殺に遇つて訴うる處なき恨を呑んで横死を遂げた愛人の幸内が姿であります。

「お孃様、あなたは幸内が可哀相だと思召しになりませんか、若し幸内が可哀相だと思召すなら、なぜ、あなたは神尾主膳を殺して下さらない、神尾を討つて幸内の仇を酬いて下さらないのがお恨みでございます、倶に天を戴かずと申しますのに、私をなぶり殺しにした神尾主膳と、さうして同じ屋敷に住んでゐていゝのですか、それで此の世に殘した幸内の恨が消えると思召しますか。今も、神尾主膳はあゝして私を苦しめてゐます、あの車井戸の音がキリ〳〵と軋る度に、私の骨と肉がそれだけ擦り減らされて參りますのです、死んだ後までも、私が可哀相だと思召すなら、どうか、あの車井戸の音だけでも差止めて下さい、あゝ、苦しい、私は神尾主膳の爲に、鐵の熊手で骨と肉とを掻きむしられながら地獄の底へ落ちて行くのでございます」

お銀様の耳には、車井戸の音も神尾の怒號も一つになつて幸内が恨みとなつて響いて來るのです。

「わたしは、あの車井戸の音が忌だ、夜更にあの音を聞くのは忌だ」

お銀様は目を閉ぢて幸内の面影を見まいとし、耳をふさいで車井戸の音を聞くまいとしました。けれども一倍けたゝましく軋り、神尾の怒號は耳をふさいでゐるお銀様の兩手を捥ぎ離すほどに烈しく鳴りはためいて、

「寢ても醒めても貴様のお喋べりが癇にさはつて堪まらない、井戸の中から出て來い、それとも土藏の中に隱れてゐるのか、土藏の中に隱れてゐるならば、土藏の戸を押し破つて此の槍で突き殺して呉れよう」

散々に井戸へ當り散らした神尾主膳は、投げ捨てた槍を拾ひ取つて此の土藏を目蒐けて突進して來ました。

神尾主膳は土藏の引戸を手荒く引はつたけれども、それは内から錠が卸ろしてあつて、引いても押しても容易に開くものではありません。

その度に激昂する主膳は、ドシンドシンと戸前にぶつかり初めます。果は槍の石突で戸の隙をコヂにかゝります。けれども尋常の雨戸と違つて、一旦、内から錠を卸ろした以上は兇暴な力を以てしても外から打ちこはすわけには行きません。

自分の力一ぱいの暴力を利用したけれども、ビクともしないので神尾は、いよ〳〵激昂して居るが、その激昂は徒ら事で、この時分にはお銀様も神尾の無駄骨折を冷笑する位の餘裕を持つて居

りました。破れるものなら破つて御覧、といふ驕れる態度を以て、お銀様は戸前で狂つてゐる神尾主膳を笑止がつてゐました。

さりとて、お銀様の此の驕慢心が永く續くものではありません、常識を失つてゐるとは云へ、兇暴の時には兇暴の知慧が働くものであります。

「坊主、お喋べり坊主、中で押へてるな、小癪な奴だ、しつかりと押へて開かないやうにしてゐるな、よし覺えてゐろ、今、開くやうにして開けて見せるからな」

神尾主膳は斯う云つて、暫らく暴力を中止しましたから、中でお銀様はそれ見ろと云はぬばかりの心持です。それは力の盡きた神尾主膳が負惜みから云つた捨臺詞と思つたからです。この捨臺詞で引上げて母屋へ歸つて寢込んでしまふのが落だらうと思つたからです。

果せる哉、それから後は扉へ突き當る音もしなければ、押したり引いたりして見ることもなく、槍を隙間へ突込んでコヂ明けようとするやうな無茶な物音が聞えません。併し、左様な物音が聞えないかと云つて、それは決して神尾主膳が此の場を去つて母屋へ引き揚げたのではありません。神尾主膳は今も猶ほ土藏の周圍をうろ／＼しながら、よろめく足を踏み縮めては醉眼を睜つて槍は片手に、そこらあたりから頻りに物を搔き集めてゐます。その搔き集めてゐる物といふのは、荒れた庭内に落ちてゐる杉の枯葉だの、木の枝だの、竹の折れたのといふ物を手に任せて搔き集めてゐるのであります。危なかしい手つきで、それを搔き集めては例の土藏の戸前へ持つて來て、

無暗に積むものだから忽ち小山のやうに盛りあげてしまひました。

「占めた！」

最後の神尾主膳が槍を投げ出して兩手で抱え込んだのは一束の薪です。その土藏の廂に高く積み上げてあつた薪の束を發見したからの事で、それを發見すると神尾は占めたとばかり、槍を投げ出して、一束づゝ抱え出して、前に積み上げた枯葉や木の枝の上へ左右から立てかけたものです。時分はよしと見た頃合に、主膳は、やはり本性たがはず投げ出して置いた槍を手さぐりに拾ひ取つて、

「坊主、覺えてゐろ、今、開くやうにして開けて見せるから後悔するな」

斯う云つて、今度は、たしかに此の土藏の前を立ち去つて母屋の方へ行く足音がします。

お銀様は神尾の擧動がわからないから、この時も負け惜しみの捨臺詞だらうと思つて、やはり七分の冷笑氣味で居りましたが、暫らくして、また足音が聞え出したのでオヤと思ひました。さても執念深い、力が盡きてテレ隱しの捨臺詞で母屋へ逃げ歸つて寢込んだものだらうと思つてゐた處が、たしかにまた、またやつて來た。

「さあ、如何だ、お喋り坊主、この蠟燭で燒き殺して呉れるぞ」

その聲を聞いたお銀様が立ちあがらないわけには行きません。事實神尾主膳は母屋へ行つて蠟燭へ火をつけて來ました。最前のガサガサは實に此の土藏の戸前を燒かうとする材料を集めてゐた

のだと氣のついた時には、決して好い心持はしません。

神尾主膳は、たしか提灯へ入れて持つて來た蠟燭を裸にして、それを積み上げた枯葉と木の枝を薪の中へ突込んで火を放けはじめたものです。それと覺つたお銀様が靜止として居られないのは其の道理です。

主膳のやりさうな事であると思ひました。酒に亂れて慘忍性を發揮せられた時の神尾は、たしかに其の位の事はやり兼ねません。また、さういふ場合に限つて、慘忍性を煽るには都合の好い智慧だけが働くやうに出來た神尾の性格を知つてゐるだけに、お銀様の怖れが一層深くないといふことはありません。

此の土藏は一方口である。前に火を放つけられると後へ逃げることが出來ない、横にも縦にも蹴破つて走るといふわけにも行かない。二階に窓があるにはあるけれども、それは筋鐵が入つて鐵の網が張つてある。逃げるとならば今のうちである。火の手のまだ揚らない先に内から戸を押開いて其處を突破するより外は手段も方法も無いことです。聰明なお銀様が其處に氣のつかない筈はありません。同時にまた走り出せば當然、神尾の網に引かゝることを覺悟しなければならないのを知らない筈はありません。神尾の憎んでゐるのは盲法師の辨信にあるらしいけれど、さりとて斯うなつた時には、獲物の見境が有るべしとは思はれない。土藏の戸前を突破し得た時は、神尾の槍先が待つてゐる。最後まで此處に踏みとゞまつて燒け死ぬか其れとも一刻を爭うて突破を試むるか。お銀様は手早く身づくろひしました。同時に神尾の聲高く笑ふのが聞えます。

「アハヽヽヽ、火水の苦しみとはこれだ、水の中へ投げ込まれて往生のしきれぬ奴が火の中で燒け死ぬのだ、お喋り坊主、これでも出て來ないか」

パチ〳〵と火の燃える音が聞えます。ブス〳〵と枯葉のいぶる音も聞えます。土藏の戸前は非常に厚味のある板を二重に張つて、中には筋鐵が入つてゐる。の部分がやつと日の目の透るほどの格子になつてゐるから、さう容易く燒け抜けるとも思はれないが、相手は火であるから、相當の時間と力が加はれば何物をも燃やしてしまひます。それが燃える時分には、土藏の中は煙で一ぱいになつて火で燒け死ぬ前に、人は煙の爲に窒息してしまはねばならないことは明らかです。手に觸れた一本の脇差を持つて土藏の二階の梯子段を轉がるやうに走せ下りました。

身仕度したお銀様は此の際に何を持つて出ようとの分別はありませんでした。手に觸れた一本の脇差を持つて土藏の二階の梯子段を轉がるやうに走せ下りました。

「お喋り坊主、何か文句があるなら此處で一番喋つて見ろ、久しく乾いてゐるからメラ〳〵と赤い舌を出して小氣味よく燃える、井戸の底へ投げ込まれて往生をし損なうのと火の中で苦しがるとどちら方が宜い、貴様の爲に、この面體に生れもつかぬ大傷が出來た、それが憎いから斯うして呉れるのだ、よく燒かれて往生しろ」

神尾主膳は濡れみづくになつた體で、燃えさかる火を望んでは喜び狂ひ、手に持つた槍の石突を火の中へ突込んでは薪を浮かせて火勢を煽らうとしてゐます。

頭から搔卷を被つたお銀樣が內から戶を押開いて、脫兎の勢ひでその燃えさかる火の中へ飛び出したのは此の時であります。

「熱、熱、熱」

お銀樣は火を踏んで搔卷諸共に其の中を轉がり出しました。

「熱、熱、熱」

同じやうに叫んで火の外に轉がつたのは神尾主膳であります。

「熱、熱、熱、出たな坊主、熱」

お銀樣も轉がる、主膳も轉がつて起き上がれない。勢の漸く加はつた火は炎々と燃え上がります。頭から搔卷を被つたお銀樣が、俵を轉がしたやうに火の中を轉がり出ると、其れに驚いた神尾主膳が同じやうに槍を持つたまゝ轉がりました。

「出たな坊主」

それでも神尾の轉がつたのは、それと見定めてから轉がつたものらしく、轉がつても槍は手放さないで二三度悶搔いてから起き直つた時にその槍を取りのべて、眼前に轉がり出した搔卷の俵を伸べ突きに突きました。

處が慌てゝゐるから槍の石突で突いてしまつてゐるから、また槍を取り直す時にお銀樣は漸く搔卷の中から脫け出すと、其の鼻先に神尾の槍の穗の稻妻です。危く其の槍の穗先を避けましたけれども、神尾の足許も手先も狂ひきつて、繰りのべる槍も手許へ引く槍も頗る怪しいものとは云ひながら確かに目ざすものを見かけて突く槍です。殊に相當に鍛練を積んでゐる槍ですから、一つ逃れてまた一つです。それを逃れると、ひよろ〳〵しながらも、よろ〳〵しながらも、ほとんど透き間もなく、やつと搔卷から拔け出したばかりのお銀樣の腰を立て直す隙もあらせず、神尾が突掛けて來る槍は凄い許りです。

「誰か來て下さい」さすがにお銀樣は女ですから、斯うなつて見ると我知らず叫びを立てました。この叫びは却て神尾に取つては、よい目標を與へたやうなもので、得たりと疊かけて突かけるのを、幸ひに梅の木があつたから、それを廻り込んでお銀樣は又しても暫しの息をつきました。その梅の木の前から諸突にして見たけれども、其れが外れたと見え神尾は左から覘つて突きました。それも手答へが無かつた爲に右から覘つて突いたけれどもお銀樣の身には當りません。斯うなると神尾は再び激昂を初めました。

お銀樣と神尾とは槎枒たる梅の大木を七たび廻つて追ひつ追はれつしてゐます。

「誰か來て下さい」

二たびお銀樣が叫びを立てた時分には、神尾とても、これが目的のお喋り坊主ではなく、日頃苦手のお銀樣であつたことに氣がついたのでせう。併し乍ら、今となつては却て其れが面白さうです　當の敵は變つても苦しむことに變りはない。苦しめて興の多いことにも變りはないのだから

神尾は一層の慘忍なる好奇を振ひ起してお銀様に槍を突掛け突掛けて更に娶む色がありません。梅の木の周圍をグル〳〵廻つて必死に逃げて居るけれど、前に云ふ通り狂つてゐるとは云ひ條、神尾の槍は相當の覺えのある槍であつて、それに油を差した兇暴性が加はつてゐるのだから槍の筋は存外狂はず、その精力も容易には衰へません。お銀様は命辛々逃げ廻つてゐるうちに帶がほどけました。ほどけた帶を踏んで危ふく倒れようとして帶に手をやつた時覺えず其手に觸れたのが、土藏の二階から驅下りる時に手に觸れた脇差であります。お銀様は帶をかいこむと一緒にその脇差を抜き放ちました。片手では帶をからみながら片手で其の脇差を構へたのは多分、神尾の槍をあしらうつもりでありませう。

斯うして見るとお銀様には、どうも多少武術の心得があるやうです。女輕業の親方のお角ほどの女がお銀様を怖れるのは、一つはお銀様の傍には大抵の時には脇差が引つけてあつて、話の調子によつては、いつ其れが鞘走るか知れないやうな心持がすると話した事があります。神尾主膳も其の後お銀様に對しては浮つかり冗談も云へないと云つたのは、たしかに其の用心があるらしいからです。

女だてらに脇差を抜いて、一方に槍を防ぎながらお銀様は漸く梅の木を離れて樫の木の後へ避ける事が出來ました。覺束ないうちに本性がいよ〳〵冴えて、神尾主膳は透かさずそれを追ひかけました。

樫の木を移つてお銀様が石燈籠の陰へ避けた時に、神尾主膳は宛ら繪に見る惡鬼の形相です。如何なる處へ逃げ隱れようとも此の怨敵を突き伏せずしては置かずといふ意氣込で、燈籠の屋根の上や、臺石の横から無二無三に突き立てました。

形ばかりに脇差を構へたお銀様は、それを振り閃かしては槍の穗先を逃れようとする。槍は屢流れ、手元は屢狂うけれども、その狂暴は愈衰ふることあるべしとも覺えません。遂に石燈籠諸共にお銀様を縫ひつけるのかと思はれるばかりです。

お銀様は石燈籠の蔭から追ひつめられたのが池の端です。池の汀を傳つて逃げると巖石がある。後ろへすされば一歩にして水です。進退谷まつたお銀様は遂に脇差を振り上げて、勢ひ込んで追ひかけて來た神尾主膳の面を覘んで、その脇差を投げつけました。

その覘ひは過たず、神尾の面上へ飛んで來たから狂亂の神尾も落ちかゝる刄を拂はずには居られません。それを槍の柄で拂はうとして、あぶない足許が一層あぶなくなつて遂に堪まらず撞と尻餅をついたのが、お銀様に取つては命の親でありました。

この僅の間を利用してお銀様は、池を通つて橋を飛び越えて一息に本邸の椽側へ飛び上がつて障子を蹴開いて奥へ逃げ込みました。

つゞいて起き上つた神尾主膳は、同じやうに池を飛び越えて椽の上へ刎ね上つたが、こゝでお銀様が廣い母屋の何れの部屋へ逃げ込んで、何れの方角から抜け出したかといふことは更にわかり

ません。

主膳がたゞ何事をか、頻りに怒號して間毎々々を荒し廻つてゐる音聲が外で聞くと物すごいはかりです。いつまで經つても例の槍は放さず、間毎々々を荒し廻りながら、襖と云はず天井と云はず、その槍の石突と穗先と兩方でブス／＼と突き立てたものです。

幸か不幸か、日頃は少くも十人以上も、ごろ／＼してゐる筈の此の屋敷に此の晩に限つて一人も居りません。今ごろ、彼等は王子稻荷の衣裳榎とやらで狐の面をかぶつて夢中になつて化かしつ化かされつしてゐる處でせう。

斯うして間毎々々を存分に荒し廻つた神尾主膳は、やゝ暫らくあつて再び椽側から池のほとりへ身を現はしました。その吐く息は大風のやうに、身體の疲れきつてゐるのは綿のやうであらうとも、最前からの主膳を物狂はしく働かせてゐるのは、慥に別に天魔波旬の力が加はつてゐるのたから、絕え入らない處が不思議です。

再び池のほとりへ立つてゐた主膳は、やはり槍は持つてゐたけれども、獲物はありません。お銀樣は遂に何れかの方角へ取り逃がしてしまひました。

殘念で無念で腹が立つて業が煮えて堪らない神尾主膳は、火のやうに燃える眼を瞋らして四方をながめる。その池の中がまた火のやうに燃えてゐるのを認めました。池が燃えてゐるのではないこの時分に、最前燒き殘して置いた土藏の戸前の火が本物になつて、炎々と燃えあがり、その炎



の色が此の池の水を眞赤に染めてゐるのです。

それと氣がついて主膳が土藏の方を見やると、植込の間から猛烈なその火勢が渦まきのぼる。火は土藏の中へ侵入すると共に、その附近の木小屋へ燃えうつつたものらしい。いよ／＼本物の火事です。

その火炎の勢を見て神尾がはじめて、やゝ溜飲を下げました。

暫らくして手製の大炬火を持つた神尾主膳は土藏に燃えてゐる火を持つて來て本宅の戸と障子と襖と唐紙へうつしはじめました。

そこで土藏と本宅とが相呼應して燃え上ります。いかに燃え出しても、此の家には其れを消さうとするものがありません。附近の人々も大方は狐の踊に出かけてゐる處であります。漸く人が騷ぎ出して火消が驅けつけた時分には、土藏も本宅も大半は燒けて手のつけやうがありません。曉方近くなつて、お絹をはじめ踊りに出た連中が歸つて見た時分には、土藏も本宅も物置の類も、すつかり燒け落ちて居ました。

## 九

王子稻荷の衣裳榎から狐の踊りが流行り出したといふことに刺戟されて、上州の茂林寺から狸の踊りを繰出してその向ふを張らうといふのは馬鹿々々しい凝り方です。

人間はそれ〴〵負けない根性に支配されて、負けない根性の爲に滑稽なる競爭と無用の濫費がつゞけられて行くのが人間の歴史の大部分です。

茂林寺の狸踊りは、土地の若い者から初まつたといふことだが恐らくさうではあるまい。江戸の物ずきが行つて、あらかじめお膳立をして置いて、それを上州名物の名で江戸へ繰込ませ樣とい ふ寸法であるとは受取れる。これは茂林寺名物の分福茶釜を形どつたもので、それに毛が生えて繪本通りの狸に化けた處を大きな張物にこしらへて、それを眞中に舁ぎ上げて日ならず江戸の市中へ乘込まうといふのは、まだ噂だけであつて事實に現れたわけではないが、その噂は早くも此方に響いて喧しいものです。

王子から狐、上州から狸の挾み擊に合つて、それを江戸ッ兒が默つて見てゐるつもりか如何かと餘計な處に氣を揉む者もあります。

「近いうちにお狸樣がお出でになるさうですね」

「左樣でございます、お近いうちにお狸樣のお通りがあるさうでございます、どこらをお通りになるか其れはまだわかりませんさうでございます」

水戸街道と云はれる松戸の方面や、奧州仙臺陸奧守がお通りになるといふ千住の方面から中仙道の板橋あたりでも、お爺さんやお婆さんが眞面になつて其噂をしてゐるほどに評判になりました。

街道の商人等は、それでも若し、お狸樣がお通りになるならば、成るべく自分達の方の街道を通つていたゞきたいものだと、ひそかに願つてゐないものはありません。

「お狸樣のお通りは一體、いつ頃なんでございませう」

「また其のお日取りが定まりませんさうで」

商人達が心配するのは、そのお通りの日とお道筋とによつて商品の仕込みをしなければならないのであります。

すでにお狐樣があり、またお鷲樣があり、こゝにお狸樣が崇拜されることも當然であります。明治の世になつて、東京と橫濱の間に一つの穴が發見せられました。それが忽ちお穴樣となつて、京濱の人士を無數に引きよせ、それが爲に臨時停車塲が出來たことを思へば、お穴樣よりは一層由緒があり來歴がある茂林寺のお狸樣の爲に、人間が狂奔するのは決して笑ふべき事ではありません。

處が、そのお狸樣は噂ばかりで、また御通行の模樣が見えないのにその前後に各街道からゾロゾロと町の立つたやうに多數の乞食が江戸の市中を目がけて繰込んで行くのが目につきます。鼻の缺けたのや、目のクシヤクシヤや、跛足や膝行や膏藥貼が、各々盛裝を凝らして持つべきものを持ち、哀れつぽい聲を振り絞つて江戸へ向つて繰込む事の體が世の常ではありません。

「今度、お情深い江戸の公方樣が、哀れな俺達にお救ひ米を下さる、たから斯うして其のお救ひ米をいたゞきに上るんだ」

斯くて毎日、江戸の市中へ繰込む乞食の數が少いものではありません。さて此の度評判の館林のお狸様、水戸の中納言様、奥州仙臺の陸奥守様、沿道の商人達がコボすまいことか、どうも商賣が濕ひつこはありません。それとは變つて箸も持たぬお菰様のお通りでは、

こんな碌でもないお通りは、追拂つてしまひたいものだと思ひました。

この際南條力の東漂西泊ぶりも亦可なり忙がしいものと云はなければなりません。甲州街道筋を出かけるから、矢張りこれはお馴染の甲州入りをするものだらうと見てゐると、八王子から急に南へ折れました。

こゝを南へ行けば甲州へは行かないで相摸へ出るのです。此の時南條の身なりは、ちよつとした無宿の長脇差と云つた風をしてゐることも、いつもとは趣が少し違ひます。さうして八王子を南へ相原道を出かけると路傍の松の木の蔭から、

「先生」

ぬつと現れたのは、惜に待ち伏せをしてゐたものらしい。これも一癖有りさうな旅の無宿者の風體です。

「やあ」

「隨分お待ち申しました」

「相變らず早い奴だなあ」

斯う云つて打ち釋けた話ぶりで穩かならぬ雲行は、すつかり取り去られたものです。

「時に先生、御案内でもございませうが、あれが相摸の大山の阿夫利山でございますよ、此方のが丹澤で、相摸川があそこを流れてゐるんでございます、甲州では例のそれ猿橋のありまする桂川で、それが此處いらへ來ては相摸川になります、これからずつと下へさがると馬入川で、東海道は平塚の此方の方へ流れ出すのがそれでございますな、秋になると鱗の細かい鮎が漁れてギヨデンで食うと、ちよつと乙でございますよ」

待ち伏せてゐたのが案内ぶりに此んな事を云ひながら先に立つて歩き出したのを見ると、何の珍らしくもないがんりきの百藏でありました。

「さうか、さうして萩野山中はどの邊に當るんだ」

「山中は此處ですよ、向ふの林に柿の木が見えませう、あれと尖がつた山の間あたりになりますな、あの山は鳶尾山といふんで、あれに抱かれて斯うなつた處に萩野山中大久保長門守一萬三千石の城下が有らうと云ふもんです、たとへ一萬石でも、あんな山の中に御城下が有らうといふのは、ちよつと素人が驚きます」

「成程」

「なーに、ほんの一足です、眞直に引張れば五里と云つた處でせうけれども、一旦、原木へ出て

戻るのが順ですから、延にして八里と見積れば、たつぷりです」

がんりきの案内ぶりによつて見れば、南條は右の萩野山中大久保長門守一萬三千石の城下なるものへ志して行かうとするものらしい。無論がんりきの百藏は案内を兼ねて其處まで同道するものと思はれる。

斯うして二人は相撲野を歩き出してゐるうちに、がんりきの百藏が、

「さて南條様、つかん事を承はるやうでございますが……」

事改まつて仔細らしい物の尋ねぶりであります。

「何だ」

「外ではございませんが、あの相生町のお屋敷といふものも隨分變てこなお屋敷でございますな」

「うむ」

「先頃まで御老女様といふ大へんに權式の高いお年寄が采配を振つておゐでになりましたが、近頃では、すつかり浪人者で固めておしまひになりましたね」

「うむ」

「處が南條様、相手代れど主代らずといふんでもございませう、代らないものは、やつぱり代りませんな」

「何を云つてるのだ」

「御老女様だけが抜けて奥向の方は、すつかり代らないじやございませんか」

「あの屋敷には奥も表もありはせん」

「御冗談でせう、奥方はおゐでにならずとも、奥向の女中達の綺麗なところが、うよ〳〵とゐる筈でございます」

「其りやあ、如何なる屋敷でも女手を無くすると云ふ譯には行くまい」

「先生、處で一つお聞き申したいのは、あの別嬪は、ありやあ今じやあ誰様の持物になつてゐるんでございます」

「あの別嬪とは誰の事だ」

「お恍けなすつちや可けませんね、多分あなた方が甲州から連れてお出でになつたんだらうと思ひますが、たゞ、あゝして預かりつぱなしにして置きなさるのか、それとも外にもう定まる主がお有りなさるのか、其邊が氣になつて堪らないから、いつか、あなたにお聞き申して見たい〳〵と思つてゐた處です」

「ふん、早い奴だな、もう、あれを知つてるのか」

「先生、餘人ならぬがんりきの百を見くびりつこなし、人の物でもわが物でも、一旦ものにしようと思つたら、逃したことの無えがんりきの百でございます」

「それで貴様、あの女をものにして見るつもりでも有るのか」

「はゝゝ、先生、彼れはかりは可けませんよ」

「ふーん」

「先生、忌な嘲笑ひをなすつちや可けません、成程、たつた今申上げた通り、ものにしようと思へは、どんな物でも、きつともものにして見せるがんりきではございますけれど、あれだけがものにならないと云ふのは、失禮ながら、あのお屋敷にあゝして澤山の豪傑が詰めておゐでになるから、それにがんりきほどの者が竦んで手を引いてゐるなど、斯う思召しになつては違ひますよ、誰方が幾人おゐでにならうとも、それを怖がつてものになるものを見すく其の儘で置いてはがんりきの估券にかゝはります、正直の處、覘ひをつけて見たことも無いではございませんが、怖いですよ、此のがんりきほどの男が慄へ上つてしまひました」

「意氣地のない奴だな」

「全く意氣地がございません」

「何が其れほど怖いのだ」

「は、は、は、がんりきの目にはあなた方は怖くはございません、江戸の町奉行や市中の金持は、あなた方を怖がつて慄へ上がるかも知れませんが、私共は其れほど怖いとは思ひませんよ、たゞ、怖いのはあの犬です、あの黒犬だけには、がんりきも怖毛をふるひますよ、あの犬がついてゐる以上は、ものになるべきものもものになりません」

がんりきが此處で怖ろしがる犬といふのはムク犬の事です。ムク犬に護られてゐるから、お君といふものに、如何なる意味に於ても一指を加へることの出來ないのを南條の前でこぼしてゐるのは此の男相當の愚痴であります。

南條は充分の揶揄氣分を以て、

「がんりき」

「はい」

「貴様、それほどに男自慢なら左様に怖い思ひをせず、もつと面白い獲物があるのだが相談に乗つて見る氣はないか」

「隨分やりやせう」

「器量は何とも云へないが、格式はあれよりズット上だ」

「成程」

「あれは貴様も知つてゐる通り駒井甚三郎の寵者だ、駒井は甲州勤番支配で三千石の芙蓉間詰の直參だが、こゝへ持ち出したのは大諸侯だ」

「お大名なんですね……」

がんりきの百が咽喉から手の出るやうな返事をする。

「さうだ、それを一番貴様がものにして見る氣なら尻押をしてやるまいものでもない」

「御冗談を仰有つちや可けません、あなた方に尻押をして戴かないからつて一人でやりますよ、さういう昔の鼠小僧なんぞは一人でお大名の奥向をドノ位荒したか知れたもんぢやありません、仕事は一人に限りますよ」

「宜しい、それでは貴樣に智慧をつけてやらう、外でもないが相手は出羽の庄内で十四萬石の酒井左衛門尉だ、今、江戸市中の取締をしてゐるのが酒井の手であることは貴樣も知つてゐるだらう、我々に取つて其の酒井が苦手であることも貴樣は知つてゐるだらう、酒井は我々の根を斷ち葉を枯らさうとしてゐる、我々はまた其處につけ込んで酒井を焦らさうとしてゐる、その邊の魂膽はまだ貴樣には判るまい、判つて貰ふ必要もないのだが、貴樣の今に始めぬ色師自慢から思ひついたのは、酒井左衛門尉の御寵愛を蒙つた尤物が今宿下りをして遊んでゐることだ、それは佐内町の伊豆甚といふ質屋の娘で、酒井家に屋敷奉公をしてゐるうち殿に思はれてお手がついてお部屋樣に出世をして當時は、或事情の下に宿下りの身分であるといふ一件だ、其の名はお柳といふ、これだけの事を聞かせてやるから、あとは貴樣の思ふやうにして見ろ」

南條は平氣な面でこれだけの事を云ひました。一體、この南條といふ男は或時は慨世の國士のやうにも見え、或時は、てんで桁に合はないことを云ひ出して掠奪や誘拐を朝飯前の仕事のやうに云つて退けもする。

こゝにはまた勸めるのに事を缺いてがんりきの百藏といふやくざ者に向つて、こんな事をも勸めたのは油紙へ火をつけてやるやうなものです。只でさへも、さういふ事をやりたくつて、やりたくつてむづ〳〵してゐる男に向つて、斯う云つて筋を引いては堪つた者ではありません。つまり、今、江戸市中の取締に當つてゐる出羽の庄内の藩主酒井左衛門尉の愛妾を盗み出せと嗾しかけたものです。

「先生、がんりきを見込んでさう仰有つて下さるのが有難え」

がんりきは額を打つて恐悦しました。

十

多分、厚木へ一晩泊り、萩野山中へ南條を送りつけて一晩泊つたのであらうと思はれるがんりきの百藏は、前と同じ道を逆に八王子方面へ向けて歸り道です。

南條は多分萩野山中に逗留してゐることだらうが、あの先生、あんな山の中の城下に逗留して何を爲さんとするのか、拙なことをして、また甲府の二の舞を踏んで牢屋へ叩き込まれるやうなことをしなければ宜いが。

南條を殘して獨り歸るがんりきの百藏は、ほくそ笑みして何とやら包みきれぬ嬉しさが面に一ぱいです。これも亦相當の謀叛氣があつて當りがついた事から嬉しさが包みきれないものと思はれる。

「もし、あなた様はがんりきの親分様ではございませんか」
これには、さすがのがんりきが少し吃驚させられました。と云ふのは、以前、來る時に自分が立つて待ち伏せしてゐた路傍の松の木の下に立つて、同じやうな形をして自分を待ち受けてゐたのが、思ひ出し笑ひをしながら歩いてゐるがんりきの横合から不意に浴びせかけたものですから、そこでがんりきが吃驚して踏みとゞまると、
「エ、これはがんりきの親分様でございましたか、御免なさんせ、斯様、土足裾取りまして、御挨拶失禮さんでござんすが、御免なさんせ、向ひまして上さんと、今度初めてのお目通りでござんす、自分は相州足柄上秦野の仁造の一家唐駒の若い者市助と發し……」
兎も角相當の心得ある博徒と見えて切口上で賭博打の言葉手形を本文通り振り出したから、がんりきの百藏もいよ〳〵面食ひました。百藏とても斯うして無宿渡世のならず者たから、その道の挨拶位を心得てゐない筈はないが、この畑道の眞中で、たしぬけに此んな挨拶を受けようとは思ひも寄らない事です。
「まあ、待つてお吳んなさい」
事があんまり突然だから、がんりきも改まつて同様の挨拶で返答をすることが出來ません。
「御賢察の通りしがない者でござんす、後日にお見知り置かれ行末萬端御熟魂に願ひます、承はりますれば親分様には……」

此方は面食つてゐるのに、先方はいよ〳〵澄まし返つて賭博打の言葉手形を正式に振り出して來るのだから堪らない。第一、自分が、がんりきの百藏なるものだといふことを此の遊び人が何處から聞いて來たらう。容子ありげに此處に待ち伏せて、わざ〳〵名乘りかけようとするのが、氣味が惡いと云へば甚だ惡い、處が其の遊び人は遠慮なく喋り立て、
「親分様には、これより江戸表へお出でなさんして、お仕事をなさるさうに承はりましたが、手前、しがなき者でござんすがお手下にお使ひ下さいますれば有難い仕合せにござんす、手前、生國と申しまするは出羽は庄内酒井左衛門尉の城下十四萬石、伊豆屋甚兵衛の娘お柳と發しまして」
「馬鹿にしてやがる」
がんりきが此處に至つて吹き出しました。吹き出したけれども險呑は險呑です。誰が此んな奴を使つて碌でもない文句を吹き込んで、おれの度膽を拔かうとした奴がある。誰といふまでもなくそれは南條先生のいたづらに違ひないと思ふから、馬鹿々々しくなつて其の遊び人の面をじつとながめました。
凝とながめられても此の先生、あまりお感じが無いやうです。
「兄い、お前は男だと思つたら女なのかい、酒井様の御城下でお柳さんといふのはお前の事かい」
がんりきは呆れて斯う云ひましたけれども、その男はがんりきが呆れたほどに呆れはしません。
あつけらかんとしてゐる處は、どうしても誰かに智慧をつけられて一夜づくりの言葉手形を濫發

したものに違ひないのです。

その男が、あつけらかんとしてゐる途端に、四邊の稻叢の蔭から同じやうな程度の遊び人體の(旅裝の)男がのこ〳〵と出て來ました。

「エ、これは、がんりきの親分樣でございましたか、御免なさんせ、斯樣、土足据取りまして御挨拶失禮さんでござんすが、御免なさんせ、向ひまして上さんと、今度始めてお目通りでござんす、自分、武州は青梅宿裏宿の七兵衞の一家、若い者八助と發し……」

「巫山戯るない、巫山戯るない」

がんりきが腹を立てると、また一方の稻叢からのこ〳〵と出て來た同じやうなのが、

「エ、これはがんりきの親分樣でございましたか、御免なさんせ、御賢察の通りしがなき者でござんす、後日にお見知り置かれ、行末萬端御熟魂に願ひます、承はる處によりますと親分樣には……」

「やい、何を云つてやがるんだい、冗談もいゝ加減にしねえと撲るぜ」

がんりきが、ぽん〳〵云つてゐるのに頓着なく引つゞいて稻叢の後から二人三人と出て來ては入り替り立ち替り同じやうな挨拶を述べるのだから、がんりきもやり切れない。その云ふ事を聞いてゐると挨拶の末には、親分はこれから江戸へ出て面白い仕事をなさるのださうだが、どうか自分達を子分にして其の仕事に一口乘せて下さいといふのであります。その面白い仕事といふのは南條力から嗾かされた一件であることを、その連中はよく承知の上で斯ういふことを云ひかけるものだといふことがよくわかります。同時に此の連中を突いて、こんな惡戲をさせたのは外でもない南條力のいたづらであることがよく判ります。

そこで、がんりきは南條の人の惡いのに苦笑ひをしてゐると、取卷いて來た連中の口說き立てることが、いよ〳〵五月蠅いので閉口です。

「クドいやい、此の胡麻の蠅奴」

がんりきは、この連中を振切つて通り過ぎようとすると其の袖に縋つて、

「御免なさんせ、御賢察の通りしがなき者でござんす、後日にお見知り置かれ、行末萬端御熟魂に願ひます、この度は親分樣のお引立により江戸表へお召連れ下さんして……」

追ひかけて來るのだから、どうにも困つたものです。

「判つた〳〵、お前達は、いやに切口上で遊人交際をしたがるけれど、あとの半分が物になつちやいねえ、誰かに敎へられた附燒刃だ、いゝから、さうしてゐねえ、一人前に二分づゝやる」

がんりきは金で追拂はうとすると遊人共は、

「御免なさんし、手前、金錢に望みはござんせん、親分樣のお手先になつて江戸表へお伴が致したうござんす」

「勝手にしやがれ」

がんりきは出しかけた財布を引こめたが、手早く手近な奴の横面を一つ撲り飛ばして置いて一散に八王子の方面へと走り出しました。

「御免なさんし、親分様お江戸までお伴が致したうござんす」

これ等の遊び人共が、がんりきの後を慕つて何處までも追ひかけるのは可なりしつこいものです。

## 十一

この時分、高尾山藥王院の奥の院に堂守をしてゐた一人の老人がありました。以前、不動堂がまだ麓の登り口にあつた時分は麓にゐたが、不動堂が頂上の奥の院へ遷されると共に此の老人も亦頂上へ移りました。

この老人の前生を聞くと、やはり一個の武藝者であつたやうです。少壯の頃より諸國を修業し年老いて此處の堂守となりました。齢はもう七十を越してゐるから、武藝の話は問ふ人でも無ければ滅多にすることはないが、發句を好んで自らも作り人を集めては敎へて居りました。麓にゐる時分には此の老人を中心としてよく運座が催されたものですけれども、頂上へうつゝては其の事がありません。發句の代りに一陶の酒を樂んで有りし昔の夢に耽りながら、多年の間、山上で一人夜を明かすことを苦なりとはしてゐません。

ある晩――丁度、十六日の月が東から登つて滿山悉く其の月光を浴びた夜半のことであります。

この奥の院近くに人の足音を聞きましたから、老人は坐つたまゝ居間の扉を押し開いて傍らにあつだ瓶子を取つて逆しまにし、その水を外へこぼすと、その傍を風のやうに通り拔けた人があります。

瓶子を片手に長い白髯を撫でながら堂守の老人は其の後を凝とながめました。奥の院から大見晴らしへ通る木の根の高い細道へ、その人は早くも隠れ去つて影だに殘してはゐません。そこには重に榛木科の植物が多いから或處は、ほとんど月の光をも漏さぬ密林です。

老人は後を見送つたまゝで小首を捻りました。今は、たしかに丑滿時、麓の若い人から頼まれた發句の點をして今まで夜更かしをしてゐたが、漸くそれを終つたから瓶子を洗つて、また一陶の酒を汲まうとしてゐる時に、この人影でしたから、老人が沈吟をはじめたのも無理はありません。時は既望の夜で、珍らしいほどに霽れた空の奥に浮かれて月を觀る人が無からう筈はないが、月と云つても今宵に限つたことはない。未だ曾て此の夜更けに、一人で此の頂上までさまよひ來る風流人はありませんでした。

併し乍ら、年を老つては無精ですから、わざ〳〵それを追蒐けて見ようとの好奇心も動かず、やがてハタと戸を締めきつてしまひました。このあたりでは鳴かない怪禽が、やゝ下つた處の飯綱權現の境内の杉の大木の梢では、しきりに鳴きます。奥の院から山脊を走る處の榛木科の多い大見晴らしへの道は、筑波の男體から女體に通ふ道とよく似て居ります。月の光も漏らさないほ

この密樹を分けてやはり大見晴らしへ通ふ人があります。堂守の老人の見たのが僻目ではなく、或時は、さやけき月の光りを白衣に受けて、それが銀のやうにかゞやき、或時は木の下暗に葉影を宿して其れが鱗のやうにうつります。道の程、八丁ばかりの處を、よれつもつれつ走つて行く人の形が、時とすると白蛇ののたつて行くやと疑はれます。

高尾の本山から右へ落つる水が妙音の琵琶の瀧となつて、左へ落るのが神變の蛇瀧となるのであります。琵琶の瀧には天人が常住琵琶を彈じ、蛇瀑の上には倶利迦羅の劍を抱いた青銅の蛇が外道降伏の相を表はしてゐる。その青銅の蛇が時あつてか龍と化して天上に遊ぶことがあるさうです。

禹門三級の水は高くして、魚が龍と化するといふことだから、蛇瀧の蛇が龍となつて天上に遊ぶのは當り前です。けれども此れは左樣なものではありません。人界の龍か、みゝずか、行者の着る白衣を着てゐる机龍之助が密林の細徑を出でゝ薄原の大見晴らしの眞中に立つてゐます。

高尾の山の大見張らしは、誇張することなくして關東一の大見晴らしといふことが出來るでせう。

この大見晴らしを絶頂とする高尾の山は、名の示す通りに山といふよりは山の尾であります。二千尺を越ゆることのない地點ではありながら、その見晴らしの雄大廣濶な趣が無類です。

その地點だけは樹木と云つては更にない一面の薄原で——薄原と云つても薄だけが生えてゐるといふわけではなく、薄も尾花も苅萱も萩も桔梗も藤袴も女郎花もあつて、その下には樣々の蟲が鳴いてゐます。

こゝに立つて東を望むと高尾の本山の頂をかすめて遠く武藏野の平野であります。東に向つてやや右へ寄ると武藏野の平野から相模野がつゞいて、相模川の岸から徐々として丹澤の山脈が起りはじめます。それを尙ほずつと右へ探つて行けば甲州に連なる山また山で、其山々の上には富士の根が高くのぞいてゐるのを晴れた時は鮮かに見ることが出來ます。それを元へ返して丹澤の山つゞきを見ると、その盡くる處に突兀として高きが大山の阿夫利山です。更に相模野を遠く雲煙漂渺の間にながめる時には海上微に江の島が黑く浮んでゐるのを見ることが出來ます。

この時に、素人は、どうかすると相模川を多摩川と見誤ることがあります。やゝあつて多摩川を發見して、あれは利根か知らんと訝かる者もありますけれど、少しく頭を冷やかにして地理を案ずれば其の區別は苦にするほどの事ではありません。

人跡の容易に到らない道志谷を上つて行くと丹澤から燒山を經て赤石連山になつて、その裏に鳥も通はぬ白根の峰つゞきが見える。富士の現れるのは、その赤石連山と燒山嶽の間であります。空氣の加減によつて道志谷の山の皺が驚くばかりハツキリして、そこを這ふ蟻の群までが見えるやうな心持がする。

やはり東を向いたまゝで、關東の平野を左の方にながめて行くと、筑波と日光の山を見ることが出來ます。月の出るてふ武藏野の西の涯に山があつてそこが即ち秩父根であります。秩父の山と

上毛の山とは切つても切れない脈を引いてゐる。妙義も榛名も秩父を除いては見ることも答へることも出來ないほど微に信濃なる淺間の山に立つ煙がのぼるのを眺めた時に心ある人は碓氷峠の風車を思ひ出して泣きます。

碓氷峠のあの風車
　誰を待つやらクルくと

その碓氷峠は想望するのみで此處から見ることは出來ないが、小佛峠はすぐ眼前に聳えてゐるのがそれです。東へ向つてゐたのをグルリと西へ向き返つて見ると、高原の鼻の先にお內裏雛のお后にそつくりの衣紋正しい形をしたのが小佛山で、駒木野の關所から通る小佛峠道は其の上を通ります。

小佛の背後に高いのが景信山で、小佛と景信の間に遠く其の額を現はしてゐるのが大菩薩峠の嶺であります。轉じて景信の背後には金刀羅山、大嶽山、御嶽山の山々が續きます。それから山は再び武藏野の平野へと崩れて行くのだが、小佛の肩を辷つて眞一文字に甲州路をながめると、又しても山又山で街道第一の難所笹子の嶺を貫いて、その奧に甲信の境なる八ケ岳の雄姿を認める。富士をのぞいてすべての山がまだ黑い時分に、先づ雪をかぶるのは八ケ嶽です。

斯うして見ると高山があり峻嶺があり丘陵があり平野があり河川が流れ海島が漂ひ人跡の到らざる處と、人間の最も多く住む處とをすべて此の高尾の大見晴らしの一眸のうちに包むことが出來る。大見晴らしの大きさは其の接觸點に立つの大きさであります。

それはさて置いて、今、月明を仰いでこの高原の薄原の中に、ひとり立つ机龍之助は此の時、もう眼が開いてゐました。否、少くとも月の微光をながめ得るほどには眼が開いてゐなければならない筈です。

すゝき尾花の中に西を向いてゐる、たつた一人の人影に、丁度、天心に到る十六日の月が隈なく照してゐます。

若し、煙霧が無ければ白根山の峰つゞきが見ゆるあたりに龍之助はいつまでか立ち盡してゐるが風はそよとも吹かず、たゞ高原の夜氣が水のやうに流れてゐるだけです。

　鳥も通はぬ白根の山に
　月の光りがさすわいな

多分、その白根の山ふところに心殘りがあるのでせう。白根の山ふところの奈良田の溫泉で、似而非の役人を一槍の下に縫ひつけたのは、さのみ恨みの殘るべきことではありません。

德間峠で倒れた時に介抱を受けた山の娘の頭のお德の事が、思ひ出になるとすれば思ひ出にはなります。

お德は親切な女でした。溫和なうちに甲斐々々しい處があつて、世話女房としての無類の情味が

あつたことを、今斯うして白根の方をながめるにつけて思ひ出さないといふ限りはありません。眼に見えない面影ながら、それを思ひ浮べると肉付のよい血色の麗しい、細い眼に無限の優しみを持つた、年增盛りであつたことを思ひやられない譯には行きません。お德の面影が思はれると、同じやうな月夜の晩に月見草の多い庭で砧を打ちながら、

甲州出がけの吸付煙草
涙じめりで火が附かぬ

と得意の俚謠をうたつた事が耳に殘ります。眼の見えた以前の人は暫く措き、眼が見えなくなつてから後の人の面影が知りたい。微しでも眼が見えるやうになつたとしたら、今までの絕望がまた新たなる希望として現はれない限りはあるまい。

その時分は荒れ果てゝ狐狸の棲處となつてゐた蛇瀧の參籠堂に行者が籠りはじめたと麓の人が噂を初めたのは、も早や百日ほど以前の事です。その後、夜な〳〵女の姿をした人が此の參籠堂へ物を運んで忍びやかに來ては忍びやかに歸るといふことも人の噂に上りました。人の噂とは云ひながら、この山麓であるから其れが擴がつたところで大した範圍ではありません。噂は噂だけに止まつて誰しも其の眞相をたしかめようとの暇を作るものはありません。その時分こそ廢つたけれども、その以前は、この瀧にかゝつて可なりの荒行をしたものさへあるとの事だから、隱れて行をする信心の行者を妨げるのを恐れ多いとして、やはり噂を噂だけにして、里人は敢て近寄らうともしません。

百日の間、參籠堂に籠つて、夜な〳〵靈ある瀧に打たれて見た時には、信心の無きものも亦、冷氣の骨に徹るものがありませう。心頭が冷却して心眼が微かに開くと共に、肉眼に光を呼び起して來ることは有りさうなことです。

巢鴨、庚申塚のあたりの一夜の出來事が緣となつて机龍之助は夢のやうに導かれて甲州街道を辿りました。夢で見た時に、自分の眼が明らかに開いて、以前、東海道を上つて行つた時の旅のすがたで、女を守る駕籠に引添うて河原の宿、小名路の花屋まで來たが、現實は其れと反對に女に誘はれて、駕籠に揺られて小名路まで來ました。

そこは此の女の土地で、その好意によつて蛇瀧の參籠堂に隱れて遂に今日に到りました。蛇瀧の水に靈があるならば、此の男の眼を癒さないといふ限りもあるまいが、事實、斯うして夜歩きをすることは、此の高原に來た時とのみ限つたことではありません。全く見えない時ですら、江戸の市中を自在に潛行して人を斬りました。

その時、小佛峠の一點に火が起りました。

大見晴しから小佛峠へ出る細徑があります。火は其の一點小佛山の頂上に近い處で起りました。野火といふほどのものではありません。當しく焚火でありませう。さうでなければ松明でありませう。焚火としても松明としても、それが時ならぬ火であることが怪しいと云へば怪しい火です。

尾花の中からその怪しい火に頸を向けて眼を注いでゐるらしい龍之助は、たしかに眼が見えるものです。其の手には僧侶の持つ如意のやうな尺餘の鐵棒を後ろにして携へてゐることも、その時にわかりました。

野分の風が颯と吹き渡ると薄尾花が搖れます。薄尾花が搖れて高原が海のやうに動くと、その波の間を泳いで白衣の鮮かなのが月の脊を向けて、山の頂上に近い處から中腹へ下りて來る事は來るが、果してそれが此の高尾の山へ來るのか、其れとも右へ廻つて與瀨、上野原の方へ下りて行くのか其の事はまだわかりません。見てゐるうちに其の火が消えました。消えたのではない隱れたのでせう。

大見晴らしからながめた小佛の全山は坊主山とは云ひながら、それを與瀨へ下りようとする中腹には林があります、多分火の光りは其の林へ紛れ込んだものでせう。

果してその松林の中を人が通ります。怪しい火と見たのは其の人の手に持つてゐた提灯でありました。その提灯とても二つ引兩の紋をつけた世間並の弓張提灯で、後には「加」といふ字が一字記してあるだけです。その提灯を携へて小佛山から下りて、この松林に入つて、多分此の松林を抜けたらば、また薄尾花の野原を高尾の大見晴らしへ出て山上に詣でるか或は山下の村へ行くものでせう。

月夜に提灯は、ふさはしくないけれど、これとても恐らくは、自分の足許を照す爲ではなく、野獸や怪鳥の害を避ける要心の爲と見れば、さのみ怪しむべきこともありません。怪しいのは、いかに旅慣れたとは云ひながら、深夜、この間道を一人で通るといふ豪膽と、それから、しかく豪膽であらしめた用向きそのものであります。

處が、この豪膽なる旅人は女でありました。笠に、手甲、脚半の甲斐々々しい身なりをしてゐるけれども女は女です。然も脊に男の子を一人脊負うて、他に全く連れとてもなく、此の山道を急ぐのであります。

あちらへ行くのを歴々と見別けることが出來ます。

あちらと云ふのは、もと來た道とは全く別な方面で、つまり小佛峠へ出る細徑のことであります。蛇瀧へは歸らないで此路を行くとすれば、右の怪しい火に心がうつゝて其れを突き留めて見たくなつたのかも知れません。突き留めれば斬つてしまうつもりでせう。たとへ眼は開いても心の悟りが開けきれない限り、彼のいたづら心は遂に止むべしとは思はれません。

來た時の路とは違つて、これから小佛へ出るまでは坊主山です。小佛そのものが全體が坊主山ですから、欅木科の密林も無ければ、松杉科の喬木もあるのではない、たゞ薄尾花が一面の原野をなしてゐるのだから、月に乘じて行く白衣の人の影は、そのまゝ銀のやうにかゞやいて、野分に吹かれて漂うて行くばかりです。けれども、それとても長い間のことでありません。最初は膝のあたりに戯れてゐた薄尾花も漸く胸に達し、遂には人丈よりも高くなつて、いつしか人影を沒し

てしまひました。月は相變らず天心を西へ少し傾いた處に冴えてはゐるけれども、高原の上は今や人の影さいふものはありません。

併し乍ら、彼方の小佛山の頂上に近い處に見えた一點の火は消えたさいふことはありません。極めて小さい火ではあるけれども、火のある處には人間のあることは確かです。人間が無ければ、それは野火の卵ですけれども、その小さな火が少しづゝ山を下りて來ることによつて、人間の手に操られてゐるさいふことは疑ふべくもありません。

その女は德間峠から緣を引いた山の娘の頭のお德であります。さうして此の女が眞夜中に此處を通るのか、蛇瀧の參籠堂に其の人がゐるさ知つて、わざく此の難路を訪れるのか、若し、さうであつたなら今宵に初まつたことではあるまい。與瀨か上野原あたりに宿を取つてゐて、夜な夜な參籠堂に物を運ぶさいふのは此の女の仕事かも知れません。

大見晴らしに立つて認め得た、一點の火をそれさ知れはさて、龍之助は迎への爲に薄尾花の海へ身を隱したのでせう。蛇瀧へ參籠して既に百日にもなるさすれば、その間に、篠井山の下の月夜段の里まで消息を通ずることは、敢て難事ではありません。兎も角も峠一つ越えての甲州國內の事ですから、女の身でも眞心さへあれば訪ねて來られない道ではないのです。况してお德は旅に慣れた女であります。奈良田の湯まで看病に行つた時の熱が冷めないでゐるならば、遙々かけた呼出に應じないさいふ筈はありません。お德の目的はわかりました。たしかに蛇瀧の參籠堂を目がけて小佛の裏道を急いたのであります。脊に負うてゐる男の子は先夫――さいふても今も夫があるのではないが、亡くなつた夫の子の庫太郎であることも疑ひはありません。

併し乍ら、龍之助の氣は知れない。遠く白根の山ふところまで、かりそめの緣(ゆかり)の女を呼び寄せて如何(どう)する氣だ。彼には近き現在に於てお銀様がある筈だ。また庚申塚の辱かしめの時から、夢のやうに此處まで導いて蛇瀧の參籠に骨を折つて呉れた古名路(こなじ)の宿の女も、たしかに宿に隱れてゐる筈だ。理想のない人には人生が色さ慾さより外にはない。生きてゐる事が眞暗であつた龍之助に人を斬るの慾さ女に接するの慾さ、その二つより外に無かつたものか知らん。今、幸に、何かの恩惠によつて、朧げながら再び人の世の光明を取り返しかけたさいふ時に、もう女無しではゐられないさいふのは餘りに淺ましい。呼び迎へる男も男だが、それに應じて來る女も女だ。

愚かなのは人間のみではありません。蟲のうちの最も愚かなのを火取蟲さ申します。氣になるのは此の女の携へてゐる提灯の後になり先になり二羽の蝶が狂うてゐることです。あまり氣になるから追つて見たけれども離れません。叱つて見たけれども、驚かないで、提灯の上へとまり、後へ舞ひ、その志は只管(ひたすら)中なる火を取らんとして、焦るものゝやうです。

二つの蝶のうちの一つは白くして小さく、他の一つは黑くして大きなものです。白くして小さきは多分白蝶さ呼ぶもので、黑くして大きなるは烏羽揚羽でありませう。この二つだけが提灯のまはりで狂ひます。

「叱、忌な蝶々たこと」

女は氣になるから片手で打つ眞似をしました。其の手をくゞつて白いのは後ろへ、黒いのは前へ隱れて、また二つが一緒になつて提灯の上へ現はれるのは人をからかつてゐるやうな仕打であります。

猛獸毒蛇も怖ろしいけれども、それは火を見ると逃げます。弱々しい蝶に限つて火を見ると却つてそれを慕ひ寄るのが怖ろしい。避けるものは身を惜しむことを知つてゐるけれども、寄るものは身を殺すことを惜しみません。火に焦れて來て、身の程を知らぬ望みの爲めに身を燒かれることを知らないものは憐れむべくも亦怖ろしいものです。

「叱つ、彼方へ行つておゐで」

この時の蝶は、たしかに戯れてゐるのではなく嚙み合つてゐるのでした。何れが早く火に觸れようかと先を爭うて嚙み合つてゐるのに違ひない。

その時提灯の火がパツと消えました。二つの蝶がその火を消してしまひました。

再び火をつける必要はありますまい。月の光りが明るいのに、そこらあたりには大文字草と見える花が一ぱいに咲いて居ります。

「もし」

消えた提灯を持つて空しく立つてゐたお德は人を呼びかけました。やゝ離れたすゝき尾花の中に朦朧と人の影があります。

「あなたは、どちらからお出でになりました」

「蛇瀧から」

といふのが其の返事です。

「此處まで、わたくしを迎へに來て下さいましたか」

お德は息をはづませて問ひかけました。

「月が好いから、つひ」

「あゝ、よくお出で下さいました」

二人はまだ離れて立つてゐます。

「まあ、わたくしは、どんなに、あなた樣のことを心配して居りましたでせう、甲府へお出でになつてから後も、それとなくお尋ねして見ましたけれど一向わかりませんでした、お消息を戴くと、取るものも取り敢へずに斯うして急いで參りました、お目は如何でございます、もう、お見えになるやうになりましたやうでございます、それが何よりでございます」

お德は、やはり息をはづませて云ふ言葉です。それでも、二人は、すゝき尾花の中に、やゝ距離を置いたのみで相近よることを致しません。

「眼が少し見えるやうになりました、薄月の光で物を見るほどになりましたわい」

「それは何よりでございます、さうして其れまでにおなりなさいました」

「此の下の蛇瀧といふのに百ヶ日ほど打たれてゐるうちに自から光がさして來ました」

「それで、もう此んなに山道をお歩きになつて罪ではございませんか、お疲れにはなりませんか」

「一向、疲れはせぬが、久しぶりで、そなたに會つた事故にあの松原で暫らく休息して悠くり物語をしたいものじや」

「それも宜しうございますが、蛇瀧のお堂とやらまでお伴を致しませうか」

「參籠堂へは、やつぱり女人は近づかぬが宜い、行つて見た處で何の風情もない、それよりか、あの松原の月の光の洩れる處が休みごろ、話しごろと見える」

「では、あれへお伴を致しませう」

「後へ少し戻つて貰ひたい」

「何卒、あなた樣からお先へ」

高尾と小佛の中の薄尾花の高原の中に立つた二人は互に其の細い道を讓りました。けれども二人の中に距離のへだゝりがあることが變りません。

一方は、火の消えた提灯を持つて、懷しさに息をはづませて居りながら、その人に近寄らうとはせず、一方も、わざ／＼迎へに來たと云ひながら、寧ろ、人には脊を見せて月に心を寄せるやうに薄尾花の中に立つてゐました。

「細い道だから遠慮をしてゐては際限がない、一足お先に」

斯う云ひながらお德の前を通り拔けた龍之助の白衣（びやくえ）が透きとほりました。その腰から裾へ朧染（おぼろぞめ）のやうに、すゝき尾花が透いてうつりました。さうして何等の音もなく風の過ぎ去るやうにお德の前を通ると、二三間の距離を置いて松原さして歩んで行きます。

この時にまた提灯の光がパッとさしました。氣を利かせたお德が早くも提灯に火を入れたものかさうでなければ、一旦、消えたと見えたのが消えたのでなく、また燃え出したのでせう。

提灯の光が再び松林の中へ入つたのは久しい後の事ではありませんでした。

龍之助は松林の夜露のかゝらない樣な處へゴロリと横になりました。いたいけな藤袴が、それに押しつぶされ、かよわい女郎花が、危なくそれを避けてゐます。

疲れのせいか横になつて、うつら／＼と眼を閉ぢてゐると暫らく／＼して紛と鼻を撲（う）つ酒の香がしました。それは餘りに芳烈な清酒の香であります。

思ひがけなく眼を開いて見ると、いくらも離れない處の松の木蔭でお德が火を焚いてゐました。手頃の木の枝を三本組み合せて、それに土瓶を釣るして下に枯葉を置いて程よく火を焚いてゐるのは其の土瓶をあたゝめてゐるのです。何時の間に用意して來たか、それとも前の日あたりに此の林へ隱してゞも置いたのか、土瓶の中には黄金色の清酒（すましざけ）が溢れるほど滿ちてゐることは、その香でわかります。その焚火と向ひ合せに、脊中から下した庫太郎を坐らせて餘念なく火を焚いて

ゐたが此方を向いて、

「もし、お目ざめならば一口召し上つて下さいまし」

斯う云はれて見ると秋の日に晒れて松茸狩に來たもの丶やうな氣分です。

「どうしてまた此んな處まで酒を持ち込んで來たのだらう」

龍之助は其れを訝りながら懶げに起き直らうとする鼻の先へ、例の土瓶と小さな茶碗を以つて來ました。

「定めし、御不自由でせうと思つて昨日のうちに、お酒とお米を少しばかり此處へ持つて來て置きました、山を通る時に松茸もありましたから、これも取つて參りました、これを召し上がつてお待ち下さいませ、只今、御飯を炊いて差上げますから、松茸の卽席料理をわたくしの手でこしらへて上げようと存じます、溫かい御酒と溫かい御飯を差上げたいと思ひまして」

酒を手に取らない内に龍之助は醉はされた心持です。口をつけると上燗に出來上つてゐる酒の香が五臟六腑に沁み渡ります。

「あ丶」

と云つて咽喉を鳴らしました。溫かい酒と溫かい飯の誘惑が己を物狂はしくするのを制することが出來ません。

土瓶の中を立てつゞけに飮みました。義理も人情もなく飮みつくしてしまひました。

その間にお德は更に溫かい飯と新らしい松茸の料理にかゝるべく焚火を加へて、その火加減をながめてゐます。それによつて見ると飯を焚いてゐるのではなく蒸してゐるものらしい。よく山の旅に慣れてるものがするやうに、濕氣のある土地に穴を掘つて木の葉を敷き、それに米を入れてまた木の葉と土とかぶせて上で焚火するといふ仕組でやつてゐるものらしい。松茸の料理といふのも多分さうしてこしらへるでせう。

溫かい酒と溫かい飯とに瞑眩した龍之助は、久しく潛んでゐた腥い血がずつと腦天へ上つて行くのを覺えます。この時に、むらむらと人が斬りたくなりました。眼に觸るゝ人を虐げて其の血を貪つてやりたい心持が、漸く首を持上げて見ると、刀のないことが、もどかしくて堪まりません。腰をさぐつて見たけれど刀がありません。

是非なく其の心を凝と抑へて、また弱々した女郎花を虐げて横になつて、かすかに眼を開くと、焚火にかゞやくお德の血色といふものが張りきれるほどに豐滿な肉を包んでゐました。

百ケ日の參籠といふことによつて辛じて惠まれた肉眼の微光は、その間、已むことを得ずしてさせられた、精進潔齋の賜物であると譯つてゐるならば、再び人間の肉と血を見ることによつて、もとの無明の闇に歸りたくは無からう。肉と血を見ないことによつて光が惠まれ、肉と血を見ることによつて光が奪はれるといふことなら、人間といふ者の生涯も厄介至極なものではありませんか。

禹門三級の卷了



昭和十四年四月二十三日新定版第一刷印刷
昭和十四年四月二十八日新定版第一刷發行

大菩薩峠（新定版）

著作者 中里介山
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行者 野口兵藏
東京市牛込區矢來町三六
印刷者 本間十三郎
東京市牛込區矢來町三六
印刷所 清揚社
東京市麹町區飯田町一ノ一六
製本所 河手製本所

一册【定價】壹圓五十錢

東京市日本橋區吳服橋二の五春秋ビル
發行所 大菩薩峠刊行會
振替東京七五八三〇
電話 日本橋（日本橋）一七一七

藏版 隣人之友社

# 大菩薩峠
## （普通版）

第一冊—第十五冊・定價各壹圓五拾錢（送料各冊拾貳錢）

- **第一冊** 甲源一刀流の巻・鈴鹿山の巻・壬生と島原の巻・三輪神杉の巻・龍神の巻・間の山の巻
- **第二冊** 東海道の巻・白根山の巻・女子と小人の巻・市中騒動の巻・駒井能登守の巻・伯耆安綱の巻
- **第三冊** 如法闇夜の巻・お銀様の巻・慢心和尚の巻・道庵と鰡八の巻
- **第四冊** 黒業白業の巻・安房の國の巻・小名路の巻・禹門三級の巻
- **第五冊** 無明の巻・白骨の巻・他生の巻（上）
- **第六冊** 他生の巻（下）・流轉の巻・みちりやの巻
- **第七冊** めいろの巻・鈴慕の巻・Oceanの巻
- **第八冊** 年魚市の巻・大菩薩峠是非
- **第九冊** 畜生谷の巻・勿來の巻・大菩薩峠是非
- **第十冊** 辨信の巻
- **第十一冊** 不破の關の巻・大菩薩峠是非
- **第十二冊** 白雲の巻・膽吹の巻
- **第十三冊** 新月の巻・大菩薩峠梗概
- **第十四冊** 恐山の巻
- **第十五冊** 農奴の巻

# 大菩薩峠
## （新定版）

第一冊—第十五冊・定價各壹圓五拾錢・（送料各冊拾貳錢）

- **第一冊** 甲源一刀流の巻・鈴鹿山の巻・壬生と島原の巻・三輪神杉の巻・龍神の巻・間の山の巻
- **第二冊** 東海道の巻・白根山の巻・女子と小人の巻・市中騒動の巻・駒井能登守の巻・伯耆安綱の巻
- **第三冊** 如法闇夜の巻・お銀様の巻・慢心和尚の巻・道庵と鰡八の巻
- **第四冊** 黒業白業の巻・安房の國の巻・小名路の巻・禹門三級の巻
- **第五冊** 無明の巻・白骨の巻・他生の巻（上）
- **第六冊** 他生の巻（下）・流轉の巻・みちりやの巻
- **第七冊** めいろの巻・鈴慕の巻・Oceanの巻
- **第八冊** 年魚市の巻
- **第九冊** 畜生谷の巻・勿來の巻
- **第十冊** 辨信の巻
- **第十一冊** 不破の關の巻
- **第十二冊** 白雲の巻・膽吹の巻
- **第十三冊** 新月の巻
- **第十四冊** 恐山の巻
- **第十五冊** 農奴の巻・十四巻迄の梗概

「新定版」「普通版」共に第三冊は「伯耆安綱の巻」の後を承け「如法闇夜の巻」に始る

中里介山作

# 大菩薩峠繪本

**第一冊「甲源一刀流の巻」より「間の山の巻」に至る**

中里介山題字
同序文
井川洗厓口繪
代田收一繪圖
野口昂明本繪

介山居士の親切な序文題字と、洗厓書伯の艶麗な彩色繪「大菩薩峠十人女」圖と代田收一氏の綿密な內容繪圖面と、それから新進畫家野口昂明君が心血を濺いだ畫面が百十八枚、何とも云はれない懷かしみのある繪本である。

定價貳圓五拾錢
送料十六錢

中里介山著

## 大菩薩峠 形譯脚本

小說「大菩薩峠」は衆生業相の展開を曲盡し、その遊戯神通を寫して遂に入曼陀羅の實相に歸するの結構なるを以て之を形譯して上演する際は此の意義に準據せざるべからず、本書は田中智學氏の紹介により嘗て帝劇にて興行の所謂演劇以上の社會的敎化を期待して許諾した際の脚本と、同じ意義に於て歌舞伎座に於て興行したる脚本とを取纏めて一本となしたるもの。

四六判一五〇頁
定價一圓三十錢
送料十錢

——圖書目錄進呈——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著

# 吉田松陰

## 革新の敎育權化

本書は維新革命の典型的志士、吉田松陰の生涯を一々根據ある書物によつて、平明忠實に寫した傳記である。維新の先覺としての非常の士松陰を知ると共に、天成の敎育家として師道の嚴たる、友愛の切なる、最も濃かなる心情を備へた、僅々三十年の人間的生涯を飾ることなく表現した、極めて意義深い力著である。今や國家總力を擧げて興亞新秩序建設の大業成就に邁進せんとする秋、また新たにこの人物及び學風を再檢討するの必要を痛感し、玆に增刷改裝して敢て江湖に奬むる所以である。

三六判三百二十頁
定價七十五錢
送料九錢

中里介山著

## 續日本武術神妙記

四六判上製・二五〇頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

——圖書目錄進呈——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著

# 日本武術神妙記

四六判美裝四一六頁

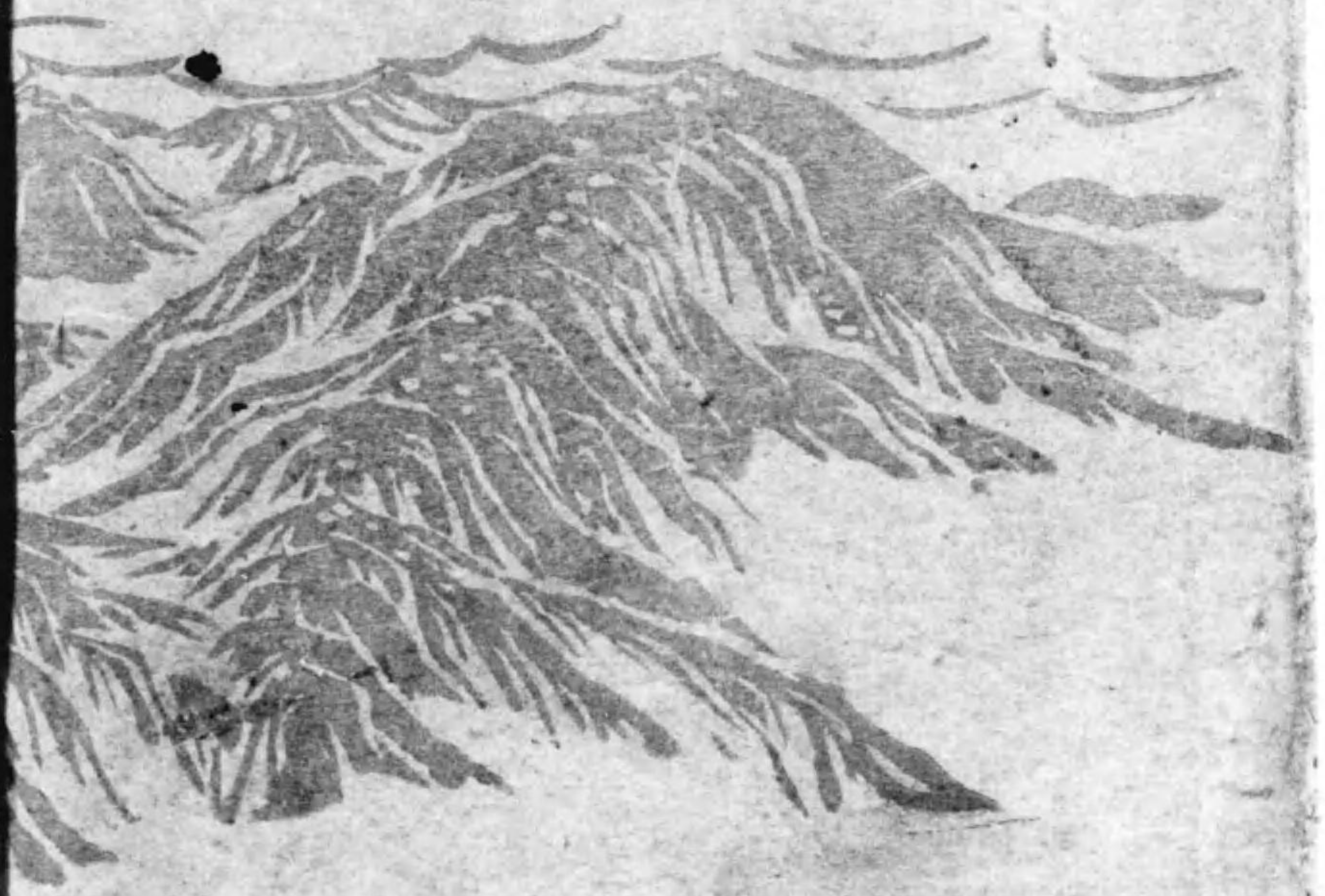
日本は武術の天才國である、これ神武天皇建國以前以後を通じての國民性であつて、決して蠻力の變形でも無ければミリタリズムの發現でもない。今や日本精神、日本精神といふ聲が一代に滿つるけれども、日本武術の神妙を知らなければ、日本精神を理解することは出來ない。日本武術のうち、戰國時代より德川初期へかけての「流派」創生時代が卽ち武術が科學的となり藝術的となつて、この神秘を表象したのである。本書は爾來維新前後に至るまでの、數百流の日本武術の粹を抜き、各々典據ある記錄により、含蓄豐かなる筆を以て、その神妙の仕合、悟道、實驗を寫したものである。從つて、舊來の小說講談の荒唐無稽を一掃し、技術の神秘が超人間に達する極意を敎ゆることに於て、天下萬人の爲に此上も無き修養書である。

定價一圓
送料九錢

東京日本橋區呉服橋春秋ビル
大菩薩峠刊行會
振替東京七五八三〇

389
15
297

終



大菩薩峠刊行會